烈祖成績　八

烈祖成績巻之八

慶長五年正月（一六〇〇）
至　同年八月

慶長五年庚子正月、豊臣秀頼大坂牙城に在り。神祖西城に在り。列侯群士登城賀正す。創業記・家忠日記・石卵餘史・関原合戦誌

二月七日、神祖の第八子仙千代麻呂夭す。時に六歳。源流綜貫

是月、世子近臣松平十三郎、江戸に在り。鼠其馬尾に巣し子を生す有り。時の人之を異とす家忠日記・餘史　安藝中納言毛利輝元、大坂に来、神祖を享（もてな）す。同心協力し以て秀頼を輔（たす）く。松栄紀事、本書曰、輝元、与神祖誓曰、内府須治東方三十国、我治西方三十三国。拠毛利家記、此安芸宰相秀元之語而太閤之所命、非輝元之私言也。且他書所不載故不取　神祖、豊後木築六万石を細川忠興に、木築或作木附・木擣国音相通　越前国府五万石を堀尾吉晴に増封す。木築六万石、合戦誌作五万石。今従細川家伝録。松栄紀事、越府五万石、餘史作六万石。今従合戦誌。拠餘史、府城龍門寺城

也 神祖、会津中納言上杉景勝不軌を謀るを聞き、増田長盛・大谷吉継をして之を問はしむ。二人対へて曰はく「景勝卿豈に異図有らんや。悠悠の言恐らくは信ずるに足らず。須らく之に趣き入り観るべし」と。乃ち長盛の臣河村長門を以て使と為し、神祖の意を以て諭す。餘史曰「神祖遣使会津諭之曰、加賀大納言謝世（死ぬ）、利勝年尚少壮、天下之事誰与商議。卿宜蚤（つとに）来京師輔佐幼居（君カ）」。按ずるに、去年神祖将に利勝を伐たんとし、和を請ふ。而るに能く宜ならず。此言合戦誌・松栄紀事に有り。但云ふ、使を遣はし之を語ると。今関原記・大全に従ふ 景勝曰はく「往年太閤命有り。越後より会津に移封し以て東奥を鎮圧せよと。京師に入るを免ぜられ三年務め管内を安輯せしむ。且は当時病に寝たり。春夏の交を須（ま）ち疾瘳えなば上途せん」と。未だ幾（いくばく）ならずして会津近境の諸将使を馳せ変を上る。堀久太郎秀治の宰堀監物直政 秀治左衛門督秀政子、後襲称左衛門督、直政七郎五郎某子 越後より来景勝の反謀を告ぐ。神祖、伊奈図書を以て使と為し之を詰問す。景勝謝して曰はく「景勝藩に在り国政を修挙す。而るに讒者無根の言を揖成（しゅうせい）（あつめる）す。讒者

と弁ずる時を願ふ。然らずんば京師に入る能はず」と。是に先んじ石田三成潜かに景勝と合謀して東西に挙兵し神祖を夾撃せんと欲す。是に至り、景勝道路を広げ橋梁を修し神刺原（こうざし）に築城し以て戦守の計を為す。創業記・家忠日記・大全・餘史・合戦誌・松栄紀事○松栄紀事曰、三成欲与景勝東西挙兵夾撃撃神祖然秘計通、召寵臣渡邉宗庵密謂之曰「汝当犯法吾佯将殺汝。然則衆必請命。吾許之。会津依景勝。景勝素識汝。必厚遇之。汝伺間告我秘計」宗庵奉命。故犯法免死走会津、告三成秘策於景勝。示反徒印章。景勝従之。鋭志起兵。神祖不知其謀。以伊奈図書為使促景勝。按ずるに、去年景勝伏見に在り、三成と密計を定む。其の異図を蓄ふること既に久し。使の至るを待たざるは明かなり。且は諸書載せざる所故に取らず。四家合考曰はく、大沼郡北田郷、昔佐原十郎義連孫廣盛居する所、応永中廣盛子孫敗亡し、城地荒廃すること百六十余年。然るに其地形勢漕運に使し、西南五六里に神刺原有り。広野平衍大衆を聚むべし。故に此四面各八町に築城し、会津山道に役夫を発し日夜督責す。時の人皆其叛謀を知る。

三月九日、麾下の士安藤九郎次基帯刀直次弟川井市介に憾み有り、独り市介の家に至り之を刺殺す。次基創（きず）せられて死す。

四月七日、阿部伊予守正勝卒す。其子備中守正次に父の禄五千石を給ひ書院番頭と為す。松平忠明従五位下に叙せられ下總守と為る。安藤五左衛門重信（木工助基能子初称彦十郎）従五位下に叙せられ對馬守と為る。（家忠日記）

是月、神祖、僧録司（僧の事務方役職名）承兌をして（承兌時住持相国寺中豊光寺）書を景勝の宰直江山城守兼續に遣し景勝に京師に来るを勧めしむ。（寛永系図曰兼續、樋口與三右衛門子也。與三右衛門事景勝之母掌薪樵。兼續有容色。景勝見而悦之告其母召為侍童甚有寵。及長于預国政、景勝欲以為家老。旧臣恥与同列故不果会。老臣直江大和守無子。景勝以兼續為其女壻継家、遂更今称。景勝在会津領百二十万石、給兼續三十万石。関原乱平、景勝削封即兼續旧領之数也。按ずるに、兼續特だ武事に長ずるのみに非ず粗文学に渉る。詩有り世に伝ふ。羅山文集文選五臣注に拠れば兼續利行なる所なりと。）

五月、兼續の復書至る。書辞悖慢（はいまん）（傲慢無礼）なり。神祖大いに怒る。（復書載在諸書今略之）

五日、神祖、諸侯大夫を西城に召し景勝を討つを下令し阪東諸国に徴兵す。（家忠日記・慶元記・大全・合戦誌・松栄紀事。諸書或係六月。拠五月七日生駒近世・中村一氏等諫東征書五月為是。今従細川家

伝録

六日、神祖、保科正直の女を家妹として養ひ黒田長政に嫁す。家忠日記・寛永系図

七日、生駒近世・中村一氏・徳善院玄以・増田長盛・長束正家連名書を上り東征を諫めて曰はく「嗣居(君)尚ほ幼く、閣下東国に赴かば則ち諸侯皆以て閣下嗣君を遺棄すと為す。諸侯亦誰か適従（頼り従う）せん。直江山城の答書無礼と雖へども彼辺鄙野にして人交際の礼を知らず。深責するに足らず。閣下且は之を忍べ。明年春に至り景勝来たらずは之を征するも晩からざるなり。然からずんば将を撰び師を命ぜば自ら足れり。之を弁ずるに何ぞ必ずしも之に親駕せんや。頻年凶歉(けん)（不作）の為に軍糧匱(ひつ)乏す。願はくは之を罷めよ」と。神祖聴かず。合戦誌係六月七日、今従家忠日記・大全○家忠日記・合戦誌・餘史皆載堀尾吉晴為六人。按ずるに、吉晴此時越府城に在り。大全之無し。是が為に今之に従ふ

八日、将佐を西城に召し軍事を議る。堀直政進みて曰はく「白川は会津に至るに

背炙（背あぶり峠）・勢至堂の険有り、地勢甚だ陜隘（きょうあい）なり、宜しく之が為に備ふべし」と。神祖色を作（な）して曰はく「我一槍を提げなば敵も亦一槍す。何の険難の議定有らん」と。乃ち号令を発す。神祖・世子白川に向ひ、伊達政宗、信夫に向ひ、佐竹義宣中山道に向ふ。最上義光・南部信直・秋田東太郎實季 實季城介愛季子、叙従五位下、襲称城介致仕号凍蛸。東太郎諸書作藤太郎誤 米沢に向かひ、前田利勝津川口に向ふ。堀秀治・村上周防守義明 義清孫、越後本荘城主。大全作頼重。今従合戦誌・武家盛衰記 ・溝口伯耆守秀勝之に従ふ。 彦左衛門勝政子、越後新発田城主。諸書作宣勝。拠前車後語集、宣勝、秀勝之子、而父子従軍。秀勝是年卒。 義明・秀勝迭（たが）ひに前駆を為す。

七月下旬を以て会津を斉攻するを期す。 年譜・家忠日記・奥州軍記・大全・合戦誌・松栄紀事 石田三成使を遣はし東征に従はんと請ひて曰はく「儻（も）し許されずは宜しく賤息隼人をして執従せしむべし」と。神祖報して曰はく「子（し）今屏居し従軍に宜しからず。宜しく家臣をして隼人の出兵を輔せしむべし」と。

十五日、神祖牙城に入り秀頼及大虞院に辞す。大全。按ずるに、神祖の東征に秀頼母子を外すべからず。諸書其辞を入るるを載せず。今大全に拠り之を書く上杉景勝、神祖の東征を聞き将校を集め守禦の術を議る。大全、詳載景勝及直江兼續問答之辞。然及石田三成挙兵　神祖班師、不与景勝接戦。率渉繁冗故略之安田上総、白川城を守り、島津解下齊を以て軍監と為す。東国太平記作月下齊騎兵一百・銃手三百を率ゐ白川城を援く。四家合考曰、芋河縫殿助守白川城。合戦誌曰、縫殿助率土寇、侵蒲生秀行之地、二説不同。今従大全今井源左衛門猪苗代城を守り、本荘出羽守重長、福島城を守る。出羽、或作越前。蓋東猶也。甘糟備後守、白石城を守り、隅田大炊隅田、諸書作須田、今従大全・横田大學、梁川城・若松城を守る。形勢絶勝にして復び備を設けず。四家合考。東国太平記曰、備後、名清長、大炊、名長義、未知是否草籠（革）（かわご）・白阪の民舎を焼き竹木を剪伐し、白川より境明神に至る二里闢け曠野と為る。城外に穿塹樹柵し又近村の民数千人を集め五百・三百毎に長を置き、村里に屯聚す。越後・出羽・下野の民を誘ひ城主の出兵を待たしむ。土寇蜂起し其後に擾乱す。大全

六月三日、前田利勝の所生芳春院及村井豊後・山崎安房、伏見より江戸に至る。家忠日記曰、五月二十日芳春院・前田對馬守・横山山城守・大田但馬守・山崎長門守等子発伏見、六月六日至江戸。合戦誌不係年月而云、村井豊後従芳春院、自加賀至江戸。餘史係去年九月。松栄紀事係是年正月。皆誤。今従大全。按ずるに、去年冬、利勝の質大坂に至る、而るに亦大全云ふ、五月二十日伏見を発すと。豈に其後之れを伏見に移さんや。未詳

十六日、神祖、大阪を発し伏見に至る。佐野肥後守綱正を以て大阪西城に留守せしむ。年譜・創業記・家忠日記・餘史・合戦誌・松栄紀事○餘史曰、加藤清正在伏見、聞神祖東征、就山岡道阿弥上諫曰「公既為内大臣。不可軽出師自将須遣吾輩及細川越中守・福島左衛門大夫・加藤左馬助・黒田甲斐守・池田三左衛門等討之。必能致勝。若猶深慮、宜命隣国諸将。伊達・最上・南部等援之。万一蹉跌、徐進大旆（だいはい＝大旗）未晩也」。神祖報曰「清正之策甚善、然吾生武門不親将兵非吾志也。清正智勇無比、留守京師伏見無過此人。而鎮西事体亦甚重大。宜帰本藩以勦（ほろぼす）兇徒」。清正奉命乃謁秀頼解纜（らん＝ともづな）而帰。按ずるに、此時、清正既に肥後に在り。伏見に在らず。且は其言近世・一氏等の書辞と大約相似たり。或は清正肥後より上書し之を諫

するか。未詳。附以備考　酒井家次・酒井忠世・本多忠政・其の弟内記忠朝　後為出雲守　・本多正純・本多康重・大久保忠常・平巌親吉・奥平信昌・其子家昌・菅沼忠七郎忠政・大須賀忠政・松平家乗・小笠原秀政・松平家清・内藤信成・本多康俊・石川康通・阿部正次・其弟正吉・高力忠房・大久保忠佐・青山忠成・其子喜大夫忠俊　後為伯耆守・戸田一西・其子氏鐵等之に従ふ。総て三千余人なり。扈従将士、諸書有異同、今従合戦誌　藤堂高虎、其弟内匠助正高を以て質と為す。神祖、其の諸将に先んじ質を献ずるを嘉す。高虎行状　鳥居元忠・松平家忠・内藤家長・松平近正を以て伏見城を守らしむ。四人を召して曰はく「我今東征す。景勝、日を不ず(おか)戮に就かん。然れば石田三成必ず間を較(はかる)して起つ。故に将帥を選ず。汝等此の城を固守し警備を惰(おこた)る勿れ。彦右衛門須らく牙城を守り、弥二右衛門松丸を守り、主殿・五左衛門三丸を守るべし」と。乃ち鳥銃二百口を家忠・近正に授く。戍兵皆大阪に還り、唯だ若狭少将勝俊西城に故の如くに在るのみ。家忠日記・餘史・合戦誌。若狭少将豊臣勝

俊、木下肥後守家定子、若州小濱城主○松栄紀事載神祖之命曰「如有変、宜以若狭少将松丸之兵為援」。按ずるに、勝俊、素西城に在り、松丸に在らず。紀事誤れり。今大全に従ふ

十八日、神祖伏見城を出で大津城に至る。京極高次之を享す。神祖、吉光短刀を賜ふ。其家臣を召し物を賜ふに差有り。是日、石部駅に至る。水口城主長束正家、子兵部少輔と来翌旦之を享すを講ず（手配する）。神祖、其城に遇ふを約す。勢州郡代篠山理兵衛、夜旅館に謁し、正家異図有りと密告す。神祖、初更急ぎ石部を出づ。夜水口を過ぎ使を遣はし有事を告ぐ。急ぎ発し其城に過（遇）ふ能はずと。大全曰、以大塚平右衛門為使。合戦誌曰、渡邉忠右衛門守綱。未知孰是。故但云、遣使。餘史曰、神祖急発従者不之覚。唯渡邉忠右衛門一人従駕。神祖怪問之、対云、臣之在麾下頗知機変、慮今夜或急発。故靠駕不眠得以備急。神祖褒之。正家大いに驚く。

十九日、土山駅に来謁し、饗せざるを以て遺憾と為す。神祖の接遇款曲（懇ろである）たり。国光短刀を賜ひ謝し之を遣はす。家忠日記・徳川記・合戦誌・雑録・篠山理兵衛事記○大全

載一説曰、三成聞神祖経森山出美濃路、将使島左近・樫原彦右衛門・杉田喜助選弓銃良手伏于多賀山。既而聞経伊勢路、其謀遂竅（あなあく）。餘史亦同此説。大全弁之曰、三成、与景勝合謀欲東西夾撃神祖。不宜作此危殆之謀、然亦不可謂必無此事。故附于此

従駕の将士織田有楽・其子河内守長孝・福島正則・其子刑部少輔正之・弟掃部頭正頼・池田輝政・其子新蔵利隆 後為武蔵守 ・弟長吉・細川忠興・其子與一郎忠隆 忠隆之妾前田利家之女也。七月忠興夫人死節而忠隆之妻不能此帰加賀。忠興怒忠隆不能絶婚。故発之剃髪寓京師、号休務 與五郎興秋・弟玄蕃頭興元 初称預五郎 ・京極丹後守高知 高吉第二子高次弟 ・筒井定次・浅野幸長・田中吉政・其子民部少輔長顕 諸書作忠政。按ずるに、十四年吉政卒す。台徳公諱字を賜ひ忠政と更ふ。此時未だ更名せざるなり。後筑後守と為る ・堀尾忠氏・山内一豊・有馬法印・其子玄蕃頭豊氏・中村彦右衛門一榮 式部少輔一氏弟 ・藤堂高虎・其子宮内少輔高吉・加藤嘉明・黒田長政・生駒主殿頭一正 雅楽頭近世子、後任讃岐守 寺澤廣高・富田知治・堀田一継・古田兵部少輔重恒・稲葉道通・山名禅高 中務大輔豊國剃髪号禅高 ・宮部兵部少輔 善祥坊祐全子、合戦誌兵部作宮内。今従大全。合戦誌又曰名長房。未知是否 ・

金森素玄・其子出羽守可重・徳永法印壽昌・其子左馬助量昌 合戦誌・松栄紀事作昌重。武家補任作景重。未知是否 ・九鬼長門守守隆 大隅守嘉隆子 ・分部左京亮光嘉・古田織部正重然 諸書或作重能。花神重勝。又有花押作重然。有与駿府記合。今従之 小出遠江守秀家 大和守吉政弟 ・一柳監物直盛 伊豆守直末弟 ・市橋下総守長勝・桑山相模守元晴 修理亮重晴第二子、後更伊賀守 ・亀井武蔵守茲矩・石河伊豆守貞政・石川玄蕃頭康長 伯耆守数正子、或作数重。今従餘史・諸士伝略 ・舟越五郎右衛門景直・佐佐淡路守・佐佐喜三郎長成・池田備後守・其子弥右衛門・天野周防守雄光・佐藤駿河守堅忠 大全作参河守堅忠。或作正清。今従松栄紀事 ・佐久間河内守政實 與六卿（ママ）正明子 ・三好為三・其族新右衛門 大全以為三新右衛門為一人。拠三好系図為三法名也、名一任釣間齊養子 ・津田長門守高勝 或作信成。拠津田系図織田隼人正信勝子、初称二郎右衛門。及信長公間覇、有織田疏属皆更津田氏 津田小平次正秀・神保長三郎相茂・水野河内守守信 或作重弘未知孰是 秋山右近・中川半左衛門忠勝・丹羽勘介氏信 勘介氏次子 ・鈴木越中守重愛・赤井五郎作忠泰・岡田助左衛門・大島雲八光義・平野九左衛門・

兼松又四郎正吉・長谷川甚兵衛重成・森宗兵衛・柘植平右衛門正俊・別所孫二郎・村越兵庫頭・山岡道阿弥・奥平藤兵衛貞治（美作守貞能弟）・河村助右衛門・山城宮内少輔・本多若狭守・本多因幡守利朝（因幡守利久子、初称半右衛門襲称因幡守）・落合新八・中村又蔵・能勢宗左衛門・清水小八郎・佐久間久右衛門安政・其弟源六勝之（安政久右衛門盛次第二子、玄蕃允盛政弟、後任備前守。勝之盛次第四子、任大膳亮。諸書此下載。祖父江法齊拠大全法齊此時任福島並則未隷麾下故今删之）・溝口源太郎・堀田権八・戸川達安・宇喜多孝親（達安孝親以与守（宇）喜多秀家松（ママ）訟付徳善院玄以。在上文四年十月、至是請従東征、神祖許之。遂為麾下之臣）・野間久左衛門・伊丹兵庫頭正親・入道意頓（号意頓拠大全）松倉豊後守重正・野尻彦太郎・仙石少貳・山岡修理・岡田勝五郎善同・箸尾半左衛門・岡田雪（江）・施薬院等先後相継して至る。凡そ五万五千八百余人。（関原軍記曰、五万八千七百余騎。餘史曰、歩卒僕圉（馬飼）合十万三千余人。今従家忠日記・奥州軍記・徳川記・慶元記・大全・合戦誌・松栄紀事）

二十日、四日市場に至る。其夜舟にて参州篠島に至る。（或作佐佐島国音相同）岡崎城主

田中吉政之を享す。水野忠重、刈谷城を出で来謁す。

二十一日、吉田城に至る。城主池田輝政之を享す。

二十三日、亭午（ていご）（＝正午）浜松城に至る。城主堀尾忠氏之を享す。父吉晴越府より来謁し従駕を請ふ。神祖、之をして越府に帰らせ以て石田三成の動静を伺はしむ。

二十四日、亭午佐夜中山に至る。懸川城主山内一豊之を享す。

其夜、島田に至る。是に先んじ駿府城主中村一氏、使を大阪に遣はし疾劇にして従軍能はざるを告ぐ。嗣子一学尚ほ幼く、弟彦左衛門をして従駕せしむるを願ふ。按ずるに、五月七日、一氏、生駒近世等と連名し東征を諫む。其後諸書藩に就くを見ず。或は書牒を以て定議するか。未詳 神祖、其詐を疑ひ頗る戒心有り。

二十五日、駿府に至る。一氏臥病し牙城に在り。故に第二城を整頓し其臣横田内膳宗治の家に於て享す。一氏輿疾して来、従駕する能はざるを以て憾と為す。神祖、其羸憊（るいはい）（やみつかれる）を見、意釈（と）け之を憫み長光刀を一氏に賜ふ。其請ふ所に従

ひ弟一榮をして兵を将ゐ東征に従はしむ。

二十六日、沼津に至る。三枚橋城主中村一榮之を享す。信国短刀を賜ふ。世子、大久保忠鄰・本多正信をして来迎せしむ。

二十七日、小田原に至る。

二十八日、藤沢に至る。翌日、鎌倉に遊び古跡を歴覧し金沢に留(りゅう)す。

（七月）一日、鶴岡八幡宮に詣で修葺を命ず。

七月二日、江戸城に至る。家忠日記・徳川記・大全・合戦誌・松栄紀事　未だ幾ばくならざるに中村一氏の計(訃)至る。神祖、其子一学をして襲封せしめ書を賜ふ。一榮及横田宗治之を輔す。一学長じて忠一を名のる。大全

七日、神祖、号令十三章を下し、軍列を定め劫略（掠奪）を禁ず。家忠日記・徳川記・合戦誌・松栄紀事○松栄紀　事曰、相伝、神祖、大小百余戦、未嘗出法令、其出軍令、唯攻小田原興此戦耳。今按ずるに、小田原を攻むる軍令も亦十三章、而して其綱領大率（おおよそ）相似る。但し、大全、此の軍令を以て十五章と為す。

稍諸書と異る　又諸軍に令して曰はく「諸将宜しく白川・佐久山・蘆野・大田原に屯し本軍の到るを待ち刻期に会津に進攻すべし」と。松栄紀事　神祖、既に東す。石田三成以為へらく「吾計行ひ得ば乃ち大阪に往き秀頼及大虞院に謁せん」と。是日、三成、備前中納言秀家・安芸中納言輝元・徳善院玄以・増田長盛・長束正家と連名し、神祖の罪十三条を誣す。書を作し以て諸侯大夫に示す。大全・合戦誌・餘史○徳川記曰、三成作弾文、会諸侯大夫於千畳舗読之。弾文（他人の悪行をあばく文）載在。合戦誌・餘史、相伝使横濱民部少輔読之。家忠日記・慶元記・大全等書並無其事。蓋後人偽作也。故不取。松栄紀事曰、三成馳書郡国勧諸将反計、然其事深秘世無知者。蓋指此連名書也。書辞載在上三書、今略之。又按ずるに、此時、秀家・輝元未だ大阪に来らず。豈に書牒往来し其事を議定せんや。考拠する所無し　越前敦賀城主大谷吉継、将に東征に従はんとし其子大学助吉久・甥（おい）（木カ）本下山城守順継等　吉久頼継兄、此吉（ママ）継無子故養甥為子　兵一千余人を率ゐ伏見を出で垂井駅に至る。石田三成、其宰樫原彦右衛門要之を遣はす。大全曰樫原、諸書作柏原誤　吉継、彦右衛門を見其故を問ふ。彦右衛門三成の挙兵を

以て答ふ。吉継曰はく「内府、執政に私有りと雖へども必ず嗣君を廃するに至らず。今景勝同僚と合謀し内府をして関東に赴かしむ。良図と謂ふべし。然れども事の成否予料する所に非ず。何となれば則ち、三成才有りと雖へども世に之を悪む者甚だ多し。此れ三成自ら取る所なり。今大事に挙し人の上たらんと欲せば則ち衆心必ず悦服せず。宜しく秀家・輝元を以て主将と為すべし。景勝と議を定め東西夾撃せば則ち志を得べし。儻(も)し然る能はずんば則ち数月の間、景勝、内府を牽制すと雖へども関西の軍輯睦する能はず。内府、反旆し西上せば則ち事甚だ危ふし。宜しく此言を以て三成を諫むべし。我も亦継ぎ往かん。子(し)宜しく先帰すべし」と。既にして吉継父子佐和山城を過ぐ。三成喜びて之を享す。合戦誌曰、吉継欲説神祖与景勝請和以弭兵革、故赴関東。三成聞之遣彦右衛門要之於路枉過佐和山。餘史亦云、要之於路吉継不得已過佐和山。家忠日記・松栄紀事皆云、吉継発敦賀赴佐和山。今従大全。又按ずるに、家忠日記云はく「七月五日、吉継敦賀を発す」と。関原軍記云はく「六月晦、吉継伏見を出で七月五日垂井に至る」と。慶長記十一日と作す。大全日不

（せ）ず。未だ孰れ是なるかを知らず○家忠日記・松栄紀事並云、吉継至佐和山謂三成曰、去年、子（し）、為諸将所悪。殆将不免頼内府之庇護。幸得無事。背恩不祥。宜従内府竭力攻戦。吾欲与子同行、故枉路過此。三成掉頭（否定）耳。語曰「吾欲通謀于毛利輝元、使居大阪城則関西皆吾党与也。率関西之大兵従後撃之則内府雖雄武豈得敵之。今内府東征、是吾得志之秋也。子、与吾有旧、胡為（どうして）舎吾而東乎」。吉継曰「生今之世、有誰敢敵内府者哉。且子志恩為讎不義之甚。豈能得志」。言甚切至。三成曰「吾計既決。不容擬議」。吉継恨怏出城。既而以為吾与彼比肩事太閤、彼以密謀告吾臨危棄之、誠所不忍。乃留子垂井。三日遣平塚因幡守於佐和山若諫之三成不聴。吉継又至佐和山党于三成、三成大喜。按ずるに、神祖、七将の兵を弭（やす）むる為強ひて三成をして致仕せしむ。三成必ず以て怨を為して以て恩と為さず。吉継能く当時の事勢を知る。亦必ず背恩不祥に発せず。忘恩讐と為す　等の語疑はし。事実に非ず。故に取らず。**吉継其方略を問ふに三成田**(日)**はく「西国に毛利一門有り。島津兵庫頭・小西摂津守其余の豪傑大阪に来集し近きに在り。信濃に眞田安房守有り。大家に非ずと雖へども勇武絶倫にして且は内府と怨隙有り。常陸に佐竹有り。下野に多賀谷有り。相馬秋田に至る諸将皆景勝と通謀す。方に内府兵を交ふるの日、**

関西の諸侯建旗し、箱根と東国の諸侯と三面より入攻せば則ち一挙にして江戸を定むべし」と。吉継流涕して曰はく「今天下事無し。故無く之を擾して竟に人手に落つるは誠に悲しむべきなり。子(し)の言ふ所皆勝算に非ず。譬ふれば奕棋(えっき)然の如し。先に成算有り、以て吾能く此の如くんば彼必ず此の如しと為す。然る後に吾能く勝を制すと。此れ中人の奕(えき)なり。若し国手(囲碁の名人)に逢はば則ち道を争ひ子を下すに必ずや意料の外に出でん。今大事を挙ぐるに五の不可有り。内府既に五老の上に班し威権日に重し。天下の諸侯皆攀附せんと欲して之を跂(き)(つまさきだって)慕す。子或は五十万石を領さば猶ほ之れ可なり、国の小位卑人帰嚮せず。一なり。今天下に大国を治むる者輝元と内府と在り。而して内府関東八州を治む。其余の諸州大荘園多し。天下其比に復する無し。而して人望の帰する所皆内府に在り。一(二カ)なり。内府、壮年より数(しばしば)甲斐・駿河の敵と戦ひ兵機に老練たり。長湫(長久手)の一戦に義勇彰かに聞こゆ。今の世に誰か能く之に敵する在らん。三なり。昔信長

公、士を好み毎に諸家名士を書く。其善き者を択び之を画く。方に其時、内府僅かに参河一州を領す。而して下画者十に九人、皆知名の士たり。今又其幾(ほとんど)を知らず。世人称する所井伊・本多・榊原・酒井・大久保・平巌・大須賀・鳥居の徒是なり。子(し)能く此の如き輩を有するを得んや。四なり。凡そ子孫を念ふは人の常の情なり。内府、部下の士死する者有らば則ち襁褓在り世禄を必とす。故に人之に親しむこと父母の如し。今諸侯誰か能く此仁心有らん。五なり。此五は人皆難き所にして内府之を兼す。其の敵すべからざるは明らかなり」と。三成曰はく「然らず。兵常勢無く変化測るべからず。今東西の大軍皆其心を一にし以て内府を撃たば蔑(いや)しくも勝たざらんや」と。吉継曰はく「子の料る所皆非なり。謀の為に事先んずる在り。餘史亦載吉継問答之語与此稍異、今従合戦誌 蚤(つと)に子の此謀を知らば、則ち内府伏見を発し兵を近江・伊勢の間に伏す。吾構へ内府を送り水口に至り長束正家と兵を合はせ前後夾撃せば則ち勝を取ること必なり。今既に江戸に帰るを得るは此

れ虎を千里の野に放つなり。事を挙げ必ず成す能はず。然れども勢既に此に至れり。之を如何ともする無し。吾子と同じく死せんと欲するのみ」と。大全・松栄紀事○大全載一説曰、吉継謂三成曰、吾有廃疾既不能軍。今欲使山城大学将兵、吾往関東謁内府伺間交刃而死、以致効耳。三成不聴曰、今挙大事不宜軽遽。吉継不得已遂輟（やむ）是より専ら三成の謀主と為り名を更へて吉隆と曰ふ。武家盛衰記曰、太閤賜諱字名吉継、至是以与三好義継同音為不祥、故更今名、今按ずるに、二本松右京大夫義継亦同時の人にして終を令（よし）とせず。特に三好義継の故を以て名を更へざるなり。安芸中納言輝元広島に在り。吉川廣家及び安国寺僧恵瓊を東国に遣はし神祖に従はしむ。恵瓊、禅僧、字瑶甫、東福寺西堂、好武有才弁、輝元親信之、住持芸州安国寺、勢埒（ひとしい）諸侯 廣家大阪に留まり恵瓊を佐和山に遣はし三成の消息を訊ぬ。三成・吉隆、恵瓊に謂ひて曰はく「内府、景勝を殄滅（てんめつ）せば則ち勢益疆大たり。嗣君天下を得ること甚だ難し。今東征の諸将に内応者多く、檄を飛ばし以て之を招せんと欲す。子亦宜しく芸州に帰り右馬頭に勧むべし、大阪城に入り鎮めよと。此の如くんば則ち内府、勢を失し

て天下悉く嗣君に帰せん」と。恵瓊大阪に帰り輝元の養子参議秀元に告ぐ。秀元聴かず。恵瓊之に縦臾（しょうゆ）（そそのかす）して曰はく「天下の大権毛利家に帰するは正に此時に在り。機失すべからず」と。即ち使を広島に遣はし輝元を招く。輝元兵四万余人を将ゐ広島を発す。松栄紀事○慶長記四万作五万曰、十九日輝元発広島。合戦誌曰、九日発広島、二十三日到大阪。。拠諸書、輝元到大阪与三成議軍事、皆在其前、故不係日 備前中納言宇喜多秀家岡山を発す 秀家発岡山及到大阪、諸書皆無所見。唯大全云、秀家・輝元各発其国。今拠之 石田三成兵三千五百を将ゐ佐和山を発し大阪に至る。家忠日記・合戦誌・松栄紀事、兵数拠餘史。但餘史曰、六月四日三成発大阪。按ずるに、此時神祖独り大阪に在り。餘史誤れり。故に日せず（日付を書かない） 大谷吉隆、吉久・頼継等を率ゐ佐和山を出で敦賀に還る。松栄紀事曰、吉隆与三成至大坂。按ずるに、吉隆敦賀より出で北国を経略す。紀事誤れり。今大全に拠る 三成、増田長盛・長束正家・僧恵瓊と議り毛利輝元を推し盟主と為す。合戦誌曰、輝元班五老之末、至是時請宇喜多秀家使輝元班其上 畿内西海に傲（きょう）し（もとめ）諸将兵を帥ゐ大阪に会す。金吾中納言豊臣秀秋・参議毛利秀元・久留米

侍従毛利秀包・島津義弘入道惟新　関原之戦、諸書皆書島津義弘。按ずるに、義弘祝髪し（髪をそる）雅新と称す。故に大全皆惟新と書く。此れ其実を得たるなり。然るに其の何時髪を下すかを知らず。蓋し太閤薨後に在るなり。今大全に従ひ此下皆惟新と書く　其子忠惟及び姪中務少輔豊久・鍋島信濃守勝茂　加賀守直茂子　・小西行長・長曾我部宮内少輔盛親　土佐守元親子　・高橋右近将監元種・相良宮内少輔長毎　左衛門尉高續子　・秋月三郎種長　筑前守種實子為長門守　・高橋主膳正長行・伊藤民部大輔祐兵　左京大夫義益子　・筑紫上野介廣門　少弐妙慧之裔下野守惟門子・毛利民部少輔高正・高田河内守・藤懸参河守永勝・生駒修理亮　諸書此下載生駒主殿頭。按ずるに、主殿頭一正神祖に従ひ東征す。蓋し其父雅楽頭近世なり。今闕疑し書かず　・服部土佐守・横濱民部少輔・奥山雅楽助・多賀出雲守・杉若主殿頭・谷出羽守衡好　諸書衡或作衞訛、細川家伝録作衡友、今訂之　・山崎右京亮・赤松上総介則房　兵部少輔義祐子　・河尻肥後守・木下左京亮・脇阪安治・堅由(田)兵部少輔等相踵し大阪に至り九万三千七百余人と号す。大全曰、九万五千余人、松栄紀事曰、十万余人、蓋挙大敵也。今従創業記・家忠日記・奥州軍記・徳川記・餘史・細川家伝録・合戦誌。

諸書載宗対馬守義智・五島大和守純玄・松浦法印鎮信・有馬修理大夫晴信・作中伊豆守重信。拠大全五人皆承大阪之檄而未嘗身到大阪。事在下文九月十月、故不書　豊臣秀秋以為へらく、吾嘗て太閤の養子と為る。分に於て嗣君の元（兄）たり。征討大将吾に非ずして誰ならん。今石田三成、嗣君の命を仮り吾曹を駆使すること諸将に異ならず。此れ公室を翊戴するに非ず、成（威力）福を張り以て志を逞うせんと欲するなり。其意を推すに天下を奪はずんば饜（あ）かず。故に神祖に帰心すと。三成之を詞（うかが）ひ知る。然れども其の故君の養子たるを以て之を殺す能はず。乃ち増田長盛・僧恵瓊と議り計を以て之を誘ふ。秀秋之に従ふ。合戦誌・餘史○家忠日記・松栄紀事並曰、三成与長盛・恵瓊謀誘秀秋曰、待嗣君至十五歳、仮天下兵馬之権於郎君。秀秋悦而従之。按ずるに、此れ秀秋松尾山に屯し三成書を致し利を慆（くら）はすの語にして此時の事に非ず。一書誤れり。故に取らず

十四日、三成使を大津に遣はし質を参議京極高次に徵（もと）む。高次聴かず。三成怒り之を攻めんと欲す。新慶長記曰、毛利秀元兵三万為追手大将、宇喜多秀家兵二万為搦手大将、将攻大津城、

従大谷吉隆之議輟不行。按ずるに、吉隆大阪に在らず。下文に注す。且は講書載せざる所なり、故に取らず。餘史亦毛利元康・立花宗茂等二万余兵を帥ゐ大津城を攻むるを載す。此れ高次北国より還り城に拠り起兵の時にして此時の事に非ず。余史誤れり。**或もの曰はく「高次、嗣君の外戚。**高次妻淀殿妹故云、然余史・松栄紀事並以此事為大谷吉隆之言。按ずるに、是時吉隆敦賀に在り、大阪に在らず。故に或は曰ふと書く**猝**（そつ）（にわかに）**攻すべからず」と。朽木河内守元綱をして之を説かしめて曰はく**元綱宮内少輔定明子、関原乱平、帰降後剃髪号牧斎**「卿、嗣君と最も親し。何ぞ内府に党して、任子を送らざる」と。高次曰はく「今嗣君の為に事を挙ぐれば則ち吾必ず之に従はん。此れ、三成、嗣君の威を仮り以て私を済せんと欲するに過ぎざるのみ。吾何為れぞ志を変へて不義の輩に与（くみ）せんや。三成来攻せば則ち吾城を枕にして死するのみ」と。其臣諫めて曰はく「墨壁未だ固からず、大敵を拒ぎ難し。佯り之と和し機に乗じて発するに如かず」と。高次之に従ふ。其子熊若を以て質と為す。**家忠日記・徳川記・大全・餘史・合戦誌・松栄紀事、熊若長而名忠高為若狭守**

三成、桑名城主氏家内膳正行廣を徴発す。常陸介入

道卜全第二子、兄左京亮蛋死、秀吉公以行廣為卜全之嗣、賜桑名城　行廣其使に謂ひて曰はく「太閤既に薨し秀頼公尚ほ幼し。縦(たと)ひ内府の政偏頗有るとも妄動干戈すべからず。今故無く兵を興すは己の欲する所を為済(な)すに似る。故に吾内府を以て敵と為す能はず。然るに擁戴を以て名を為さば則ち拒むべからず。而して密かに関東に通款(つうかん)し市井の行を為さば則ち誓為す能はざるなり。故に今徴発に従はず城堡に拠守す。時至らば則ち秀頼公の為に尽忠効力せん。是れ吾志なり」と。神祖、其言を伝へ聞き本多忠勝をして之を誘ひ帰順せしむ。忠勝使を遣はし之を勧む。行廣曰はく「吾太閤の眷遇を被り造次(ぞうじ)（短時間に）幼君を忘るる能はず。使若し再来せば必ず将に之を戮さんとす」と。竟に弟志摩守・寺西備中守と城に拠り自守す。大全　宇喜多秀家、諸将と議りて曰はく「今数万の兵を大阪に聚めて坐し敵の至るを待つは非計なり。吾内府の策を料るに三有り。会津に進攻する能はずは則ち必ず江戸に引き還らん。或は反旆(はんはい)し（旗をかえす）西上せん。三者の外に出でず。我越境出師し其声勢を張らば

則ち先人人の気を奪ふ有り。以て志を得べし」と。衆皆称善す。乃ち毛利輝元・増田長盛大阪に在り秀頼を護るを約す。秀家・三成・長束正家、諸将と美濃・尾張に屯す。若し内府西上せば則ち輝元、大阪に在る所の諸将を率ゐ大阪を急発す。秀家・輝元三万余の大軍に指揮し以て一戦を決せんと議定まる。三成、輝元に西城に移居するを勧む。使を遣はし佐野綱正をして避去せしむ。綱正拒む能はず西城を出で伏見城に入る。毛利秀元、僧恵瓊・吉川廣家・宍戸備前守等二万余人を率ゐ濃州に向ふ。秀家、三成に謂ひて曰はく「先に伏見城を屠し鳥居・内藤の首を梟し然る後に濃州に出屯せん。卿須からく帰藩し四方を経略すべし」と。三成之に従ひ二千余兵を大阪に留め以て攻城の援と為し佐和山に還る。大全 大津城に至り高次に謁して曰はく「輝元・秀家、明公を以て北国の大将と為す。此れ貴藩興隆の兆なり」と。高次之を享す。其臣安養寺聞齋 初事浅井長政、見元亀元年姉川之戦 重臣黒田伊豫に謂ひて曰はく「三成の挙兵必ず成す能はず。今幸い此に来たり。之を

執るは一夫の力なり。吾能く之を弁ず」と。伊豫聴かず、聞齋、山田三左衛門・赤尾伊豆を此れを以て説く。伊豆、浅井亮政家老美作季子　三人同辞（同じように言う）して曰はく「今之を執らば輝元必ず大事を遣はし佐和山を来攻せん。此を去らば遠からず前後に敵を受く。此れ危道なり」と。聞齋曰はく「然からず、関西の諸将三成に脅え蒲伏聴命す。今渠魁（きょかい）（かしら）を執らば則ち諸将波駭し群疑蜂起す。輝元惶惑（こうわく）（おそれおののく）せん。計出づる所無し。我亟（すみ）やかに一介（一人）を遣はし之を関東に報ぜん。内府大旆鼓行して西せば則ち平蕩（ふらふら）の支党翹足（のび上がる）して待つべし」と。伊豫等終に用ゐる能はず。論弁の間に三成辞去し佐和山に還る。聞齋甚だ憤惋（ふんわん）（怒り嘆く）す。三成至大津、餘史係七月十七日、合戦誌八月四日、未知孰是。大全不日。今従之　是に先んじ岐阜中納言秀信、神祖の東征に従はんと欲し戒厳を下令す。部兵皆萃に習ひ務むる靡（な）し。鎧冑鮮麗ならんと欲し軍装亟やかに弁ずる能はず。石田三成、川瀬左馬助を以て使と為し之に挙兵を勧む。秀信、其宰百百越前守・木造左衛門佐

壹忠を召し之を議る。左衛門佐名拠大全所載、其手書　壹忠固く諫め之を拒む。秀信焉に従ふ。既にして密かに嬖臣入江左近・伊達平左衛門・高橋一徳齋を召し其可否を問ふ。皆辞を同じく三成に党せしむ。秀信之を然りとし、自ら書を作し三成に報す。左馬助夜を冒し佐和山に還る。

翌日秀信、宰臣を召して曰はく「吾計已に決す。復び上諫するを得ず」と。宰臣皆黙す。初め秀信幼時、豊臣秀吉、徳善院玄以をして之を輔導せしむ。故に宰臣去就を決するを玄以に請ふ。壹忠・越前守京師に馳せ至り之を告ぐ。玄以大いに驚きて曰はく「安んぞ此亡国の言を聞くを得んや。宜しく亟やかに計を決し以て東征に従ふべし」と。二人立ち帰る。秀信軍議を定めんがために出で佐和山に赴く。二人之を知らざるなり。星夜馳せ帰るに、三成、人をして之を中路に要めしめて曰はく「黄門君佐和山に在り。二子須からく此に来べし」と。二人驚き訝り佐和山を過ぐ。三成厚く之に賂す。二人秀信に従ひ岐阜の備に還り玄以の言を陳

ぶ。秀信聴かず。飯沼十左衛門曰はく「君侯既に佐和山に赴き、其勢輒ち東征に従ふを得ず。軍議に託言し三成を城中に召し之を殺すに如かず。首を関東に伝へば則ち以て佐和山に往くの過ちを償ひて不世の功を建つべし。其三成を殺すこと、請ふ、臣一人敢へて之に当たらん」と。若く（かくのごと）諫むること再三なるも、秀信固く左近・平左衛門等の言を信じ終に用いる能はず。宰臣已むを得ず遂に城守の計を定む。大全・合戦誌・餘史　加藤清正肥後熊本城に在り、黒田如水豊前中津城に在り、皆三成に応ぜずして神祖に属す。松栄紀事○本書曰、蜂須賀賀家（家政カ）在大阪。其子至鎮将従東征。増田長盛遣使誚（しょう＝せめる）責之。至鎮曰、吾豈睽（けい＝そむく）嗣君哉、然不可受汝等指麾。輒率五千余兵入海畔宅為拒守之計。長盛等請和。至鎮径帰阿波。拠諸士伝略、文禄二年秀吉以至鎮叙従五位下任長門守、時八歳。是歳家政致仕剃髪、至鎮受封、時十五歳、英敏之士、雖或有此挙措而諸書所不載、頗非無疑、故不取　増田長盛、使を伏見城に遣はして曰はく「備前中納言将に大軍を率ゐ城を攻めんとす。其期近きに在り。寡兵以て衆に敵すべからず。吾、内府と交親なるを以ての故に暁譬

す。以て生路を開き速やかに城を致し退去すべし」と。松栄紀事曰、三成・長盛遣使云云。

按ずるに、此時三成佐和山城に在り、今大全に従ふ　鳥居元忠・松平家忠・内藤家長・松平近正之に応じて曰はく「縦ひ吾輩怯懦にして城を棄て東に走るも、足下、内府の眷遇を切思せば則ち当に吾輩を策励し死を以て固守すべし。而るに反りて避去せしむるは殆んど望むに非ざるなり。内府、家に勇士多しと雖へども特(た)だ吾輩四人を択び以て之を守る。百万の兵をして席巻して来せしむるも決して避去せず。孤城援無し。請ふ、速やかに来攻し以て吾輩の勇を試みよ。使若し再来せば、必ず其首を斬り以て軍に徇(みせ)しめん」と。元忠城下の人家を焼き厳しく守備を為し諸将に請ひて曰はく「西兵来攻す。各其所を守り互いに相救はず、必死決戦せよ」と。飲宴し之を誓ふ。大全・合戦誌・餘史・松栄紀事

十五日、宇喜多秀家伏見城を攻む。合戦誌作十九日、今家忠従日記（ママ）・徳川記・慶元記・大全　秀家及び長束正家城東を攻め、島津惟新・其子忠恒・鍋島勝茂城西を攻む。野村肥

後守眞隆・其子兵庫頭眞俊・松浦伊豫守城北を攻め、毛利輝元・石田三成の部兵西北を攻む。豊臣秀秋・垣見家純・熊谷直陳東北を攻め、其余増田長盛の部兵反(及)大阪の弓銃隊将十余人、鎮西将士総三万九千余人三面に城を囲み其南を闕く。諸書不挙兵数、関原軍記曰、三万六千騎。今従大全○合戦誌曰、秀家及長盛・正家武平攻城東、秀秋及毛利豊前守勝永攻東北、野村眞隆文（父）子・鍋島勝茂・長曾我部盛親等攻城北、毛利七郎兵衛元康・毛利秀包・吉川廣家等攻西北、島津義弘父子攻城西。与此稍異。今従大全。又按ずるに、餘史曰はく勝茂・義弘大阪に在り、毛利輝元と秀頼を護ると。諸書に拠れば二人実は伏見城を攻む。餘史誤れり 毛利輝元・長束正家大阪に在り秀頼を守衛す。是に先んじ、豊臣秀秋、兵を将ゐ筑前を出で豊前小倉に至る。其宰平岡石見守頼勝の妻 拠合戦誌頼勝初称牛右衛門 黒田如水の姪女なり。故に如水密かに使を小倉に遣はし頼勝に謂ひて曰はく「石田三成等京畿に挙兵するは名を擁載(戴)に託し、実は私謀を逞うす。宜しく中納言を諫め帰順すべし」と。頼勝諾し秀秋之に従ふ。如水使を関東に遣はし之を神祖に告ぐ 大全 是に至り秀秋密かに其の宰稲葉内匠頭正成を

城中に遣はし（正成林宗兵衛正三子、初称八右衛門、出継稲葉兵庫頭重通、称稲葉内匠頭、後更佐渡守、其妻齋藤内蔵助利三之女、春日局是也。大全曰、秀秋卒後正成為僑人流寓、及猷廟生、妻為乳母、其子丹後守正勝、執政為小田原城主頼勝、及秀秋領備前美作給二万石為備前兒島城主。未幾、忤（さからう）秀秋之旨屏居。神祖召之給濃州之地一万石）諸将に謂ひて曰はく「諸、高臺院を送り（秀吉公夫人杉原氏）父木下肥後守質となるに及ぶ。吾も亦入城し敵を禦がん」と。島津惟新、再三城中に通款し、入り同じく守るを請ふ。鳥居元忠其詐を疑ひ許さず。秀秋・惟新已むを得ず城を攻む。木下勝俊は秀秋の兄なり。性素怯懦（もときょうだ）にして諸将、秀秋と通謀するを疑ひ之を忌む。勝俊自ら安んぜず。時に秀吉夫人京師三本木第に在り、勝俊之を護るに託し城を出で逸（のが）れ去り小浜城に還る。乱平らぎ神祖其封を奪ひて之を放つ。（家忠日記・合戦誌・松栄紀事、勝俊封除間居洛東霊山号長嘯子、久号天哉翁、以善倭歌著名、有挙白集行于世）元忠諸将と守禦の方略を議定す。元忠牙城を守り内藤家長西城を守り松平家忠正門を守り松平近正・甲賀佐左衛門名越丸を守る。（名越或作名古屋国音相同○合戦誌曰、佐左衛門、山岡道阿弥秀弟号甫

庵、束髪称佐左衛門、初道阿弥領崎（騎）兵十人率一百人。及従東征、使佐左衛門率騎卒入城。城陥戦死者過半。神祖録其子孫隷麾下以阪部三十郎為隊長。甲賀百人組是也 佐野綱正・巖間兵庫・深尾清十郎・石部小一郎、松丸を守り、駒井猪之助直方 拠佐佐木系図。江州山走（徒）月性院秀国子、初仕武田信玄有勇名。武田氏滅仕麾下 治部郭を守る。城兵僅かに二千余人。諸書或云一千八百人今従大全 兵庫清十郎及び直方皆関東代官なり。餘史・松栄紀事。守禦将士諸書有異同、今従大全・合戦誌 石田三成、諸将を来労す。兵三千を分け其臣高野越中・大山伯耆に授けて曰はく「城兵決死に出で闘はば則ち其鋒当り難し。須からく此兵を以て横から之を撃つべし」と。指揮方定まり自ら五百を率ゐ大阪に往く。高野越中・大山伯耆、合戦誌作川瀬左馬助・樫原彦右衛門。今従大全 後軍鍋島勝茂来、前軍に代はる。松平家忠其間に乗じ開門突戦す。越中・伯耆之を横撃す。家忠戦利あらず収兵し還る。敵直ちに進み入城せんと欲す。家忠城門を闔づ。敵火箭・大銃を発し日夜来攻す。諸将悉力拒守し相持すること十余日。大全 輝元・三成・長盛相議り諸将を敵（きょう）（つなぐ）せんと欲す。関東に在

る者の妻子大阪城に入り以て質と為る。使を細川忠興第に遣はし其夫人の入城を請ふ。夫人答へて曰はく「宰相の第宅、城を去ること遠からず。願はくは妾をして移居せざらしめば則ち幸なり」と。三成等怒る。

十七日、兵をして之に趣かしむ。守る処の小笠原松齋（余史係十五日、合戦誌係十九日、今従細川家傳録・大全。松齋諸書作正齋或勝齋。今従細川家伝録本書、云、初称少左衛門名秀清）・河喜多石見・稲富伊賀祐直（名拠細川家傳録）謝して曰はく「忠興東行す。請ふ姑（しばら）く之を待て」と。三成聴かず、急ぎ之を囲む。夫人、松齋・石見・祐直を召し障を隔て之に謂ひて曰はく「妾、体を丹後宰相に託せらる。城に入り辱めらるべからず。部兵拒ぎ闘はば則ち犯上（目上に反抗する）の罪有るを恐る。宜しく之を厳禁すべし」と。遂に刃に伏して死す。松齋君臣の礼を存し敢へて夫人の屍に近づかず眉尖刀を取り介錯す。石見及金津助二郎正直と其第に火をかけ皆自殺す。祐直亡げ去る。（餘史・合戦誌・松栄紀事皆云、夫人手殺其所生十歳男子・八歳女子而自裁。松齋・石見及細川平左衛門等力戦斬敵数輩自投烈火燔死。）

大全弁其非曰、余質之、細川家士人不聞其有二雅子及細川平左衛門者、且夫人命正齋・石見厳禁拒闘則其為妄明矣。細川家傳録亦無其事。大全之説是也。今従之。松栄紀事又云、松齋置火薬於側火其第、夫人骸骨悉成灰燼。此与佐和山城陥土田桃雲事相似。諸書所不載故不取

三成之を聞き大いに驚き以為へらく、妻子を拘執せば則ち東行の諸将我を怨むこと益深からんと。是に由り其事遂に寝(や)む。

徳川記・慶元紀・合戦誌・餘史・松栄紀事・細川家伝録○大全・合戦誌、並曰、稲富伊賀以怯懦不為士人見歯（同類にかぞえられる）、然精於鳥銃、下野守忠吉師之。乱千（平カ）細川忠興欲捜索戮之、忠吉懇祈、忠興許之。伊賀剃髪号一夢、遂以其術鳴于世。各按ずるに、二書及び餘史備載、黒田長政・加藤清正・有馬豊氏・加藤嘉明守る処の臣、計を以て脱す。如水・長政・清正・豊氏・嘉明の妻皆謀略精審、変に処するの才有り。然れども神祖の事業に関係せず。故に取らず。

臣按ずるに、忠興夫人、明智日向守光秀の女なり。光秀弑逆に及び、忠興之を出だし丹後の村里に流落す。後に太閤の命を以て夫妻初めの如くと為る。其時に当たり諸侯の妻入り側室淀夫人に見(まみ)ゆ。

即大虞院

忠興夫人其父逆を為すを恥ぢ事に託し之を辞す。其志操固(もと)より已に称すべし。大阪奉行之に入城を迫るに及

び死節の大義を首倡す（真っ先に主張する）。晉の沈勁洛陽の難に死し、以て邦に徇（みせ）しむ。君子其父を以て累を為すに充てず。而して其れ凶逆の族を変じ忠義の門と為すと称す。丈夫既に得難し。矧（いは）んや閨閤の人在るをや。其れ犯上の罪に陥るを恐れ、部兵を厳禁し拒闘するを得ず。難に臨み自処（自死）を用（執）し決烈たり。慷慨し死に赴き従容（しょうよう）として義に就く、両（ふた）つながら之を得と謂ふべし。

立花宗茂筑後柳川城に在り。

是日、宇喜多秀家・毛利輝元徴発す。書到り宗茂将校を集め之を議る。其宰小野和泉曰はく「内府諸将を率ゐ東征すと雖へども上杉・佐竹大敵なり。之に克つは誠に難し。曠日（何もせず毎日）持久し東西合撃せば則ち内府智謀有りと雖へども、進退度を失ひ箱根の険（嶮）に拠り以て関東を保つに過ぎざるのみ。天下悉く秀頼公に帰し関東を蕩定（とうてい）（平定）すること掌握中に在り。宜しく亟やかに大阪に赴き以て大老奉行の命を稟（う）くべし」と。衆皆之を善しとす。立花参河増時入道賢賀曰はく（名増時、

拠立花飛騨守清直儒臣安東守経所書

「吾智将は無形に勝つと聞く。諸君の論ずる所皆形跡なり。内府兵略に長じ能く末を料る。然れば馬首未だ東せず。必ず関西事有るを知る。然れば則ち上杉・佐竹を棄てて勇敢なる諸将と還軍西上せん。大老奉行、秀頼公の命を仮り発号施令すと雖へども其志一たび戦はば必ず利ならずんばあらず。黒田如水・加藤清正、三成・行長と積（年来の関係）相能からず。必ず当に内府に左袒す（味方する）べし。府城を拠守するに如かず。如水・清正と協謀し征討の議を定めば則ち国家以て久安たるべし」と。宗茂曰はく「汝曹の尽忠画謀各其理有り。然るに我太閤の恩に浴し且輝元卿と旧有り。成敗を論ぜず唯だ義を視るのみ。当に為すべき所は今輝元卿の指揮を得、戎馬に竭力し以て秀頼公を翊戴せんこと、是れ我志なり」と。議定し遂に其兵二千五百を将ゐ柳川を発し大阪に赴く。大全挙一説曰、宗茂聞関西鐸騒問其去就、衆議不一、宗茂曰、秀頼公幼弱、内府代之為政、宜属内府以励戦功。乃以其臣山田正兵衛為使輸款神祖。既而秀家・輝元書到、専以翊戴（よくたい）秀頼為名、故宗茂変志赴大阪。按ずるに、下文十月、

宗茂、如水・清正と講和す。宗茂、清正の言に答ふるに拠れば宗茂素大阪に帰心するは明らかなり。故に今大全正文に従ひ敢へて一説をせず

十九日、世子江戸城を発す。其兄結城少将秀康・弟下野守忠吉・蒲生秀行・井伊直政・本多忠勝・松平飛騨守忠政 諸書作忠隆。按ずるに、忠隆、忠政の子、寛永九年年二十五にて卒するに拠り慶長十三年生まるるを以て父忠政たるは明らかなり。又按ずるに、創業記・松栄紀事、忠政初め飛騨守たり、十四年摂津守と改称す。今此に拠り之を訂す ・其弟忠明・森忠政・眞田信幸・石川康長・仙石越前守秀久 初称権兵衛事秀吉公 ・日根野徳太郎高吉 後任筑前守 ・成田左衛門尉氏憲・皆川廣照・山川民部・多賀谷左近・水谷左京太夫勝俊等焉に従ふ。 勝俊伊勢守治持子、拠大全民部・左近・勝俊皆秀康卿部将也 総六万九千三百六十人 大全作三万九千三百人、合戦誌三万七千五百人、関原軍記三万九千二百七十人、今従奥州軍記・徳川記・餘史・松栄紀事 世子、宇都宮に至る。前鋒榊原康政、佐久大田原に至り後軍古河栗橋に至る。 創業記・餘史・合戦誌・細川家傳録・松栄紀事至宇都宮。諸書日闕 堀尾吉晴、神祖の命を奉け浜松城を出で将に越前守の府城に往

かんとす。

是日、参州山中に至る。諸書無日。創業記考異曰、十九日夜加賀井殺水野和泉守。大全曰、十八日吉晴出浜松、十九日遇変、二十日帰浜松。今拠二書係是日　途に石田三成の党加賀井弥八郎重望に遇ふ。武家盛衰記作秀望、未知孰是、濃州猪鼻城主弥八郎其（某）子其（某）属織田信雄戦死。重望匿居郷里、後事秀吉公　重望之を詒（あざむ）きて曰はく「吾東国に赴き行間（こうかん）（陣中）に効力（っくす）せんと欲す」と。吉晴曰はく「子（し）三成と懇款たり。内府必ず信に之（いた）らず。刈谷城主水野和泉守、今日池鯉鮒駅に来会す。和泉守に憑き以て先容を為すに如かず」と。重望喜び吉晴に従ひ池鯉鮒駅に至る。永井直清本慶長記・慶長一説記並曰、吉晴途中偶逢木村弥一右衛門、後逢加賀井重望。弥一右衛門向東而行、重望謂吉晴曰、足下今欲何適、曰、欲赴越府。重望曰、幸有自我郷通越府之道、我今欲往東国効忠内府、然使足下途中無虞輒入越府、則雖不赴東国其忠相同。我欲導足下、可乎。吉晴曰、甚善。乃相佯至池鯉鮒駅。大全曰、吉晴行至参州、二月遇弥一右衛門。至山中遇弥八郎詒曰云云。先臣佐佐宗淳曰、聞之、水野氏家士相伝非池鯉鮒駅而芋川也。併附以備一説　忠重之を享し甚だ歓するを相得たり。昏に及び重望忽ち

起坐抜刀し忠重を撃殺す。吉晴急ぎ持す（対応する）。重望の刺殺の事起くること倉猝（そうそつ）にして燭滅し弁別する所無し。忠重の臣、吉晴之を殺すと意ひ坐に入り乱斫（しゃく）す（たたき切る）。吉晴七創を被る。唯だ近臣鈴木與八郎のみ重望の所為と明知す。合戦誌曰、忠重侍童竹本左門年十三、在側審知重望之所為。今従大全・慶元記・餘史・慶長一説記　忠重気息纔（わず）かに属（つ）き與八郎に謂ひて曰はく「堀尾我を救ふ。慎み吉晴を傷する勿かれ」と。旅寓に扶け帰り創を治す。忠重の臣外に在りし者其故を知らず、争ひ旅寓を集囲し将に吉晴を攻めんとす。與八郎奔り至り忠重の言を告ぐ。衆解け去る。然れども其所由を知る莫し。重望の頸を検し上所の柱の錦嚢に秀頼の印章を得。書有りて曰はく「内府を殺すを得ば則ち功最に居（お）く。其次に則ち井伊・本多・水野等の帥（かしら）一人を殺さば則ち郡国を封じ以て其功に酬（むく）ゆ」と。是に於て方（まさ）に三成の佼（＝狡）する所にして其刺容（客カ）を為すを知るなり。徳川記・大全・餘史・合戦誌・松栄紀事　細川玄旨丹後田邉城に在り。長子忠興・次子興元・嫡孫忠隆皆東征に従ふ。玄旨、三成の党来攻す

るを聞き其臣に謂ひて曰はく「州兵多く忠興父子に属し東行す。兵を見るに甚だ寡し。宮津・久美・峯山三城を棄て一城に拠り専力し以て之を拒ぐに如かず」と。

拠大全、宮津城旧忠興所居、此時忠興為豊後未（木カ）築城主、久美城忠隆所居、峯山城興元所居、三将皆従東征。故三城無主。餘史曰、玄旨居宮津城興元居日（田）邉城及小野木公卿来攻玄旨出宮津入田邉非也。今従大全

乃ち第三子僧妙庵と嬰城固守す（立てこもる）。家忠日記・徳川記・餘史・合戦誌、妙庵号福寿院

三刀谷監物孝和、宗族部兵五百余人を率ゐ入り援く。大全・合戦誌、諸家文書纂、拠大全・文書纂、孝和、弾正忠久扶子、世領雲州三刀谷邑、久扶死孝和尚幼、依安国寺恵瓊朝鮮之後従毛利輝元有戦功、輝元不録其功流寓京師、玄旨善遇之、故率兵入城。乱平、忠興招之豊後給一万石。孝和以為薦我神祖以列麾下。故称病不出。与亀井武蔵守茲矩有旧、去而之因幡、依茲矩

二十日、敵将小野木縫殿助公郷諸国城主記・松栄紀事作重勝。蓋初名也。今従合戦誌・餘史・細川家傳録及公卿手書花押

・石川備後守・谷衡好・藤懸永勝・小出吉政・生駒左近正俊雅楽頭近世孫、讃岐守一正子、襲称讃岐守

・山崎左馬元家（允）盛・別所豊後守・杉原伯耆守長房・齋村

左兵衛則継等（諸書無則継今拠下文十一月則継自殺、補之齋村左兵衛即赤松左兵衛也。詳注於十一月）歩騎一万五千余を帥ゐ来攻す。玄旨能く寡兵を以て之を拒ぐ。孝和驍勇にして屢敵兵と戦ひ之を却く。（徳川記・慶元記・餘史・合戦誌・松栄紀事○大全無石川備後守・谷衡好・藤懸永勝・別所豊後守而有織田上野介信包・川勝右兵衛尉・山名主殿頭・毛利甚八、与此異。今従細川家傳録）家盛、池田輝政の妹夫にして輝政夫人は神祖の女なり。輝政東征に従ひて、夫人大阪第に留り在り。家盛、夫人を脱（奪）し以て帰款の効を為さんと欲す。密かに輝政の処守（留守兵）の臣と謀り、夫人病有りと称す。家盛、増田長盛の第に抵り説きて曰はく「吉田侍従の妻久しく床蓐（じょく）（＝褥）に臥す。医憂鬱疾を成すと言ふ。願はくは二子を大阪に留め妻を吾采邑三田に遣はさん。意に任せ道遥かに有馬温泉に浴し以て之を治さん」と。長盛、毛利輝元と議り之を許して曰はく「二子を大阪に留めば則ち請ふ所の如し」と。家盛喜び夫人及び保姆を二輿に乗せ二子を其側に潜め置き之を三田に送る。諸将と田邉城を攻め健歩を関東に遣はし報じて曰はく「家盛計を以て吉田

侍従の夫人及び二子を取る。田邉城に入り幽齋と同守せんと欲すれども敵、夫人及び二子を奪ふを恐る。故に已むを得ず諸将と同じく城を攻む」と。神祖聞きて之を嘉す。大全

二十一日、神祖江戸城を発す。松平康元留守を為し石川家成之に副ふ。餘史、家成作忠後（俊カ）今訂正之 板倉四郎右衛門勝重街市を監る。勝重八右衛門好重第二子後為伊賀守 伊奈忠次郡県を監る。

二十四日、下野小山に至る。池鯉鮒の変に水野忠重の臣其実を究めず遽（にわか）に健歩を遣はし、堀尾吉晴、忠重を殺すと告ぐ。吉晴の子忠氏宇都宮の営に在り。世子の近臣皆忠氏を禁するを請ふ。世子曰はく「吾信濃守の人と為りを熟知す。縦ひ帯刀不義を為すとも信濃守絶えて阿党の嫌無し。吾其の他無きを保す（責任をもって請け合う）」と。健歩継ぎ至り加賀井重望の所為を告げ、其事始めて暴（曝）白（明らかになる）たり。人皆世子の明断に服す。松栄紀事曰、神祖聞池鯉鮒之変遣使宇都宮、使世子幽忠氏。世子対曰、云云。

餘史云、神祖使池田輝政幽忠氏。皆非也。今従大全 神祖、忠氏を召し吉晴の功を褒め水野勝成を以て刈谷城主と為す。書を忠重の旧臣に賜ひ、諭すに、嗣として将士を拊循（撫循）（いたわりてなづける）するを以てす。慶長記・徳川記・合戦誌・松栄紀事○四家合考曰、世子深悪弥八郎之所為、故使水野勝成殺其子。餘史曰、弥八郎之子匿濃州、乱平、有人捕之献。神祖賜之勝成。勝成殺之。拠大全、重望之子在大垣城、西尾吉次諭福原直孝出之。故不取

臣按ずるに、建久の初め大河二郎兼任の擾乱に奥羽の由利忠八維平戦死し、葛西三郎清重、健歩二人を遣はし急を鎌倉に告ぐ。一人は病にて路に留まり、一人は鎌倉に至りて曰はく「小鹿島橘次公成戦死し、由利忠八遁れ去る」と。源頼朝之を聞きて曰はく「健歩の語誤れり。此れ必ず維平首を授け公成跡亡きなり。吾其平生を以て之を料り審かなり」と。翌日健歩病瘳（い）えて至る。果たして其言の如し。夫れ台廟守文（先代のおきてを守る）の君の将略、遠く頼朝の上に出でて其堀尾忠氏の無二を料る。英断卓識適（まさ）に相類する有りて忠氏の忠良勤恪（真面目な

勤め）亦以て信の上に取るに足る有るなり。

其夜、鳥居元忠・松平家忠の報至り、石田三成伏見城を囲むを告ぐ。神祖、使を宇都宮に遣はし世子に告ぐ。諸将を召し其方略を問ひて曰はく「関西大いに乱る。景勝を進み討つと、班師し三成を勦ぼすと、二者、宜しきは孰れぞ」と。先づ本多正信曰はく「諸将東征に従駕し妻孥悉く大阪に在り。豈に之を念はざらんや。宜しく諸将を慰労し各采邑に還し以て其意を安んずべし。勲旧の臣をして箱根の険を固守せしめ以て来鋭を挫かん」と。井伊直政曰はく「天与取る弗（な）く其咎を受くるに及ぶ。宜しく速やかに大旆を畿内に進め四海を混一（統一）すべし」と。関原軍記・餘史以守箱根之険為酒井忠次之語。下載。井伊直政之言曰、守箱根関誠為良策、然遠参二州祖宗以来所有之国、不可使敵侵掠、此二州宜建台旆於駿府、秀忠公屯浜松、忠吉公屯岡崎、本多中務・榊原式部与臣三人屯吉田、敵来清洲攻福島正則、則臣等出自吉田撃之、来岡崎則正則邀撃之、其余諸将見幾而進則而軍雖衆必摧破之矣。神祖聞之曰、汝言誠善、然西上為多算矣。合戦誌亦載此説、按ずるに、忠次慶長元年卒す、頗る夫事実なり。今松栄紀事に従ふ、

然れども直政の言見る所無きに非ず。故に附し一説に備ふ

二十五日、神祖、世子・秀康及び前軍の諸将を小山の営に召し諸将に謂ひて曰はく「三成、景勝に通謀す。関西大いに乱る。縦ひ諸将三成の姦謀を明知すとも、名を秀頼を擁護するに託せば則ち其意に違ひ難し。且は諸将の妻子皆大阪に在り。身此に在りと雖へども心は必ず彼(かしこ)に在り。三成に党せんと欲する者宜しく速やかに西帰すべし。吾毫も憾む所無し」と。諸将未だ対へざるに福島正則進みて曰はく「今三成の指揮を受け閣下に敵するは正則甚だ之を恥づ。嗣君に事へて他暘(えき)(かげひなた)無ければ則ち神明之を鑑(かんが)み、請ふ、閣下の前駆を為し兇徒を勦絶(そうぜつ)せん」と。

餘史曰、正則進曰、征伐兇徒之後、当如何処置嗣君。神祖曰吾無怨於秀頼。唯欲拠斥姦宄(かんき=心が悪くよこしまなこと)以正紀綱耳。正則曰、然則趣駕以西征。願属麾下以尽忠。今従大全○餘史、小山軍議後亦載神祖還江戸議征討。正則・忠興等応対之言。按ずるに、大謀小山の営に定む、再議に宜しからず。餘史誤り複出す。故に取らず

黒田長政曰はく「吾輩皆妻子を大阪に棄て麾下に属し以て東征に従ふ。今豈に其志

を変じて兇徒に与せんや。宜しく景勝を討つを輟め以て関西の敵を勦すべし」と。細川忠興・加藤嘉明其謀に賛成す。神祖悦び諸将を享す。餘史・合戦誌・松栄紀事　山岡道阿弥・岡江雪をして諸将に問はしめて曰はく「今前後に敵を受く。孰れ先に討つべし」と。皆曰はく「宜しく関西を先にすべし」と。神祖益悦び出で諸将に見えて曰はく「然らば則ち正則・輝政魁首を為せ。諸将相継ぎて発ち、正則守る所の清州城に入り、以て我の到るを待て」と。大全　森忠政をして信州川中島に速帰せしめ以て景勝の党与に備ふ。細川家傳録　処分既に畢る。山内一豊進みて曰はく「下官居る所の懸川城は海道の要衝たり。糧食亦諸に足る。之を献じ以て大兵を屯せん」と。神祖之を善しとす。是に由り海道の諸将争ひ其城を献じ以て神祖の意を安んず。家忠日記・大全○合戦誌曰、山内一豊与堀尾忠氏友善、毎事謀於忠氏。及被召謂忠氏曰、今日之事当有何策以応顧問。忠氏曰、吾欲献懸川城以安公意。一豊然之入請献其城以為首謀。神祖果悦。他日忠氏談其事笑曰、對馬守因人成事。使吾不得復有所言矣。松栄紀事為一豊・忠氏同時発言。大全亦云、一豊謀於忠氏而先言之。今従二書　神

祖、徳永法印壽昌に謂ひて曰はく「子(し)美濃に在り、能く地形を諳(し)る。且は戎軍に老(な)れたり。勝敗を策するは何如なるべし」と。対へて曰はく「鎮西中国の諸将皆三成に党し以て戎馬を興す。天下の安危此一挙に在り。安藝の輝元・備前の秀家・筑前の秀秋皆大敵なり。岐阜中納言土地広からずと雖へども其門地を矜り妄(みだ)りに自尊大なり。岐阜中納言秀信、信長公孫信忠子、故壽昌云然 此四人の者官爵相埒(ひと)しく互に威望を争ひ毎(つね)に相下らず。其れ肯(あ)へて俛首(ふしゅ)(うつむく)し三成の号令を聴かんや。宜しく将帥をして景勝に備へしめ星夜西に馳せ以て其鋒を摧(う)つべし」と。神祖曰はく「誠に料る所の如し。凡そ軍の勝敗は大将一人に在り。我其器に非ずと雖へども関西の諸将を歴算するに未だ我と雌雄を争ふべき者を見ず。五旬内外に必ず能く群兇を掃蕩し一統に帰せん。宜しく各戦功を励み以て其志に副ふべし」と。乃ち驪馬(りば)(純黒色の馬)を正則に、騮馬(りゅうば)(黒いたてがみのあか馬)を壽昌に賜ふ。大全・餘史 議既に定まり諸将皆誓書を献ず。本多正信其事を掌る。大全・合戦誌・関原外記 将に諸各江戸に帰り任

子を大城に納めんとす。慶長記・大全・慶長一統記 神祖行軍の列を定む。福島正則・細川忠興・黒田長政・徳永壽昌・金森素玄・筒井定次・富田知治・稲葉道通・分部光嘉・市橋長勝前軍を為す。井伊直政・本多忠勝軍監を為す。池田輝政・浅野幸長・堀尾忠氏・山内一豊・有馬法印・其子豊氏・中村一栄・一柳直盛・西尾吉次・九鬼守隆・水野勝成後継を為す。秋田實季も亦征西の列に在り。請ひて曰はく「命を奉じ将に西行せんとするも賊管内に起つ。其帥浅利與一と号し党与数百人を率ゐ湊城を寇(う)つ。賤息（我が子を卑称して言う）忠一郎 實季第二子称安倍玄蕃 之を撃却す。然れども残党未だ平ならず、竊(ひそ)かに群起す。願はくは従役を免かれ以て之を掃蕩せん」と。神祖之を許す。近臣に謂ひて曰はく「城介（秋田實季）実に従軍せんと欲せば則ち良臣を択び城を守ること可なり。縦(たと)ひ寇賊隣国を来侵すとも諸将来救し以て万全たるべし。吾其意を観るに此れ必ず景勝に通謀し以て両端を持す。今之を督責せば彼当に辞する無く役を避くべし。然る貳を懐(いだ)くの人、終に恃(たの)むに足らず。之

をして其志を従はしむるを知らざるなり」と。乱平し封を削する其源は此に起く。大全 神祖、結城少将秀康に命じ宇都宮城に拠り以て景勝を防がしむ。秀康固く従駕を請ふ。神祖之を面諭して曰はく「汝年壮気鋭なり。唯だ従軍の喜ぶべきを知りて留寄の任の重きを知らず。我軍将士の妻子多く質と為り江戸城に在り。汝此に在りと聞かば則ち将士皆其心を安んじ復び東顧の慮無くして専ら力を戦陳に用ゐん。況んや景勝は疆敵なり。吾の西上を聞かば彼必ず進軍せん。能く其鋒を摧つ者は汝に非ずして誰ならん」と。因りて其の方略を授けて曰はく「景勝入冠(寇)し利根川に進み至らば則ち交鋒し雌雄を決すべし。然らずんば切に与戦する勿れ」と。秀康乃ち命を奉く。年譜附尾・餘史並曰、神祖聞三成及集将佐議之。本多正信請召秀康卿諮之。神祖召問去就秀康卿曰、方今東西煽起、揣其軽重西重栄（東）軽、大人宜星夜西馳以討三成。奥州之任児能当之。命伊達政宗塞信夫口、堀久太郎拠津川口。児屯宇都宮以扼景勝進軍之路。請、　大人勿復憂矣。正信称賛以為良策至於感泣与此大異。按ずるに、秀康卿勇鋭剽悍にして必ず此老成持重の言を発せず。今創業記・合戦誌・松栄紀事に従ふ　乃ち世

子に命じ宇都宮を秀康に付けしむ。直ちに本軍を将ゐ上野・信濃を出で以て戦所に会す。土方雄久・大野治長を赦し之を召還す。雄久、前田利勝と親眷たるを以て之を加賀に遣はす。利勝を諭し会津を攻むるを罷め北国の敵を勦(ほろぼ)し以て大軍を関西に会せしむ。家忠日記・徳川記・大全・餘史・合戦誌 木曽義就の士馬場半左衛門昌次・山村甚兵衛・千村平右衛門小山に従軍す。神祖三士を召して曰はく「木曽郡吏石川備前守、三成に党す。汝等速やかに木曽に帰り之を討平すべし」と。三士命を奉け木曽に赴く。神祖書を木曽郡士に賜ひ之を安輯す（安心させる）。石河光吉、兇従(徒)に与すと雖へども心に両端を持し木曽士人の質を収めず。故に安輯し易し。乱平の後、光吉此を以て誅を免ずるを得。家忠日記・大全・合戦誌・餘史・松栄紀事 脇阪安治、神祖に帰款すと雖へども勢已むを得ず叛徒に党す。故に其子安元をして東征に従はしむれども道路梗塞し往くを得ず。山岡道阿弥に告状して大阪に還る。神祖書を賜ひ之を慰撫す。又使を肥後に遣はし書を加藤清正に賜ひ以て鎮西の軍事を委す。

清正将佐を集め之を議る。僉(みな)曰はく「大阪以西皆三成に党す。独り孤城を守り後に援兵無し。願はくは之を熟図せよ」と。清正曰はく「朝鮮の役に小西行長、吾功を妬み三成と明比(朋カ)（特定の仲間とだけ結合する）し我を太閤に讒す。禍幾（災いのきっかけ）測れず。幸い太閤英明にして其無罪を知り再び航海せしめ援け肥後を以て方面の任を受く。此れ太閤の莫大の恩にして三成・行長の為す所怨み骨髄に徹す。皆汝曹知る所なり。今内府を撃つこと嗣君の意より出でなば則ち我当に奔走し命を聴くべし。嗣君未だ十歳に至らず。皆三成・行長の姦計、内府を滅して己の威を立てんと欲す。宿将我輩の如きも亦次第に剪除す。嗣君を陵蔑して兵馬の権を奪ふ、其志瞭然にして覩るべし。内府に左袒し兇賊を艾夷(がいい)（賊を平らげる）するに如かず」と。将佐皆称善す。乃ち使者に対へ命を奉け専ら戦守の討(計)を為す。餘史○毛利家記・松栄紀事

並曰、清正在熊本城。遣其臣桑山某於大阪謂毛利輝元曰、聞、三成与内府揮兵、足下亦党於三成、若以大和国予我則当時兵至大阪為東征之前駆与内府決勝負。然則福島・黒田亦当与吾同志。輝元報曰、大和増田長盛所領、不得私授之、

子蒙太閤之厚恩先来京師為嗣君励戦功則賞如所謂。清正不喜、乃決意属神祖。按ずるに、清正深く三成を怨む。素神祖に帰心し応に大和を以て去就を決し販夫商容の如かるべからず。故に今取らず。本願寺門主光昭、庶兄光壽と神祖に東征を訊ねんが為に行き尾張に至る。石田三成使を遣はし之を固要す（固くそうさせない）。光昭大阪に帰る。是に先んじ、光壽庶長子を以て本願寺門主と為す。其父光佐の嫡妻光昭を生み姿色有り。光佐死し関白秀吉之を嬖し、遂に光壽をして位を避けしめ光昭を以て門主と為す。故に光壽失勢孤立し僅かに其父退隠の旧刹を領すのみ。光佐号顕如上人、光壽教如上人、光昭准如上人 是に至り独り関東に往き款を輸（うつ）す。神祖之を嘉す。乱平せば則ち別に門主と為すを約す。先づ参河以東を浄土真宗仏寺録（ろく）とせしめ、其後本願寺東西二寺に分為す。所謂（いわゆる）東本願寺是なり。大全・合戦誌○諸家伝曰、本願寺顕如拠大阪城拒織田信長、長子教如有策略、屡困信長奉 数講和、顕如入雑賀道場授本願寺於季子准如而寂。教如憤之建一寺於東隣而居。一宗分為二寺。時人称之東西本願寺 豊臣秀秋使を小山の行営に遣はし山岡道阿弥・岡江雪に就き謝して曰はく「伏見城を攻むるは本吾

志に非ず。督責（責任）逃避する所無し。衆に従ひ攻囲す」と。会戦の日に莅（のぞ）（＝臨み）み戈を倒し以て其罪を購はんと請ふ。神祖之を許す。大全 是に先んじ、島津惟新も亦た神祖に上書し其忠に異なる無きを明らかにす。然るに石田三成之を固要す。惟新已むを得ず及（反）徒に党す。黒田長政其情を知り暁諭し帰順せしむ。三成之を聞き急ぎ之を促す。惟新辞する能はず遂に三成に属するを決志す。合戦誌・慶元記・松栄紀事

二十七日、神祖、伊奈図書を奥州に遣はし伊達政宗に方略を以て岩手沢城を授く。今更称仙台 陣を堅め持重し、与戦し以て景勝の師に先んずる勿かれと。合戦誌・餘史 是に先んじ、政宗大阪に在り。西城に至り神祖に謁して曰はく「下官常に上杉景勝問（間）に乗り管内を侵掠するを恐る。願はくは、閣下の東帰に先んじ以て守備の計を為さん」と。神祖、其の守禦に託言し会津の地を取らんと欲するを察し、之を戒めて曰はく「景勝は大敵なり。彼若し出兵せば則ち当に之に応ずべし。我より彼を擾（う）

つべからず」と。政宗曰はく「此時に乗じ敵地を取らずんば則ち終に大家を作すを得ず」と。神祖笑ひて曰はく「英雄の本色自ら露る。慎み、軽挙し以て敗を取る勿かれ」と。政宗悦び岩手沢に還る。景勝の別将甘糟備後白石城を守る。諜告ぐに、備後妻を喪ひ会津に還ると。政宗兵を将る白石城を攻む。濱田治部・中目大学・山川帯刀（事跡注于十九年）・木村隼人先登す。備後の弟弥三郎固守し下らず。隼人鉛に中り死す。城中に内応者有り、政宗の兵を引き城に入れ城遂に陥つ。政宗、濱田治部をして城を守らしめ叔父成實・妻の父田村右京亮清秋と進取を議る。景勝の別将本荘重長守る所の福島城を攻め声言し将に梁川城を攻めんとす。重長、岡左内（後称越後）・富田将監を遣はし隊将と為す。栗（粟カ）生美濃齋道仁（美濃初称寺村半左衛門道仁称小田切所左衛門、仕麾下、長鍬之後有戦功、有故去仕景勝。後称伊豆）・北川図書・布施二郎右衛門・安田勘助・外池甚五左衛門・町野主水等を率る梁川城を援く。（大全曰、左内・図書・甚五左衛門・主水、蒲生氏郷之士、秀行減封皆為倫人。景勝移封会津召為己臣）政宗兵二万を将る国見嶺を

越え信夫に至る。五千を分け梁川城兵に備へ、又一万五千を分け三隊と為す。政宗・成實・清秋各一隊を将ゐる。梁川の援兵、黎明福島を発し瀬上に至る。政宗福島に進向し松川を隔てて陣す。岡左内、川を渉り戦はんと欲す。栗生美濃争ひ不可と為す。左内聴かずして水を渉りて陣す。従兵皆渉る。政宗急進し之を撃つ。敵兵敗走す。政宗の兵、北川図書・布施二郎右衛門・安田勘助を斬る。政宗、左内と川中に闘ひ左内著る所の猩猩氈（ママ）二を截るも甲堅く傷せず。美濃横から馳せ之を衝く。政宗馬を回し、左内撃ち鎣簾に中（あ）つ。政宗勇気撓まず、麾兵進み城門に薄（せま）る。本荘重長後門より出兵し将に之を横断せんとす。政宗兵を収めて退く。敵将梁川城主隅田大炊、政宗備ふる所の兵を撃たんと欲し巌井靱負・築地修理及び佐竹義宣の援兵車丹波等をして名取川を渡り之を撃破せしむ。政宗の輜重を獲り其戎幕を奪ふ。大全曰、巌井靱負之部兵西羽千右衛門獲政宗之紋竹雀之幕。乱平、政宗遣使景勝請以白石城易幕。景勝不聴曰、白石城以卿武力所取幕、我兵竭力所得、宜各存其功、因謂其下曰、旌旗帷幕為敵所奪、右（古）今部将

之所恥、故政宗欲易之、而我不之許也。他年景勝毎旅行、必施彼幕於賤率卿舎以矜其功　政宗の前鋒軍を回し戦はんと欲す。敵兵引き梁川城に入る。政宗、福島に至らず駿河見河上に陣す。本荘重長、信夫山に出屯し政宗と一夜を相対す。

翌日、政宗撤兵し還る。大全・合戦誌・餘史○拠大全七月九日、政宗自大阪還巖手沢。間一日。十一日出兵十三日囲白石城、二十六日戦于松川、二十七日引軍還。合戦誌日辰有異同。今欲事実接続、故不係日　謀り復び発兵し福島城を攻む。是に至り神祖の命を奉け巖手澤城を守り復び兵を出さず。合戦誌・餘史　安濃津城主富田知治、小山営に在り。神祖之に謂ひて曰はく「古より東西の鏖戦（おうせん）（その場に踏みとどまって尽力戦をする）多く濃州青野原に在り、我当に一戦し之を破り直ちに京幾（畿）に進むべし。然るに勢州海路通らずは則ち京幾に行軍すること甚だ難し。宜しく本州に帰り海寇を攘斥すべし」と。知治命を奉け松阪城主古田重恒・巖手城主稲葉道通・上野城主分部光嘉　此非伊賀上野伊勢上野也　小山を出づ。知治の臣疋田助右衛門迎を為す。知治戦艦十四五艘を泛（うか）べ乙部浦を過ぐ。是に先んじ宇喜多

秀家・毛利輝元、九鬼嘉隆をして紀州新宮城主堀内安房守と鳥羽城に拠(よ)らしむ。淡州巖屋城主菅平右衛門、嘉隆と舟師を率ゐ海路を扼(おさ)ふ。嘉隆、助右衛門の船と遇ひ之を鉤し与に戦ふ。嘉隆の臣九鬼兵部、助右衛門と相搏ち共に海に沈む。知治の兵戦死するもの二十余人。知治・重恒・道通・光嘉間に乗じ過ぐるを得。各其城に帰り拒守の計を為す。徳川記・合戦誌並云、嘉隆鉤知治之船欲撃殺之。知治以其為旧友詒（あざむく）之曰、吾欲与石田三成討内府。故潜出小山還国。嘉隆信之縦（はなつ）之而去。大全弁之曰、嘉隆専為大阪尽力攻。剽不顧其子守隆在関東。豈能存旧友之義乎。特受秀家・輝元之命攻剽耳。其説是也。今従大全及慶元記　光嘉、上野城に帰り其地守り難きを以て城を棄て安濃津に来、知治と同守す。家忠日記・徳川記・餘史・合戦誌・松栄紀事　眞田昌幸及び長子信幸・次子信仍駕に従ひ東征し上野大(犬)伏邑に至る。石田三成・大谷吉隆、書を昌幸に遣はし啗はすに大利を以て引き己の党と為す。昌幸使を前軍に遣はし信幸を召還し叛去を以て諭す。信幸曰はく「大人(たいじん)素(もと)太閤の恩に浴す。今内府に属さば則ち世或は之を議する者有らん。左衛門佐、

大谷刑部の女壻にして親戚関西に在り。宜しく彼と上田に還り以て機変を察すべし。児（私）内府の眷顧を蒙り且は本多中務と姻戚たり。願はくは寛容を蒙り以て内府に属さん」と。信仍固く争ひ以て不可と為す。語頗る信幸を侵す。信幸怒り将に之を刃せんとす。昌幸、之と和解し各其志に従はしむ。昌幸・信仍、犬伏より軍を引き還り叛徒に党し、信幸、宇都宮の営に還り（大全）本多正信に就き、其事を神祖及び世子に白す。世子、之を初めの如くに遇す。神祖、書を信幸に賜ひ其忠純を奨め昌幸の所領小縣郡を給ふ。昌幸犬伏より還り夜沼田城を過ぐ。使を遣はし入城せんと欲す。信幸の妻は本多忠勝の女なり。辞して曰はく「良人、役にあり、今同じくは帰せず。此れ必ず故有り。中夜開門するを得ず」と。内れず。昌幸、之を如何ともする無し。又使を遣はして曰はく「孫男、生三歳、吾之を見んと欲す。城外に送り出すべし」と。妻曰はく「察するに公の意、孫を抱かんと欲するに非ず。殆んど将に挟し（おどす）以て質と為さんとするなり。妾、敢へて命

を聞かず」と。因りて士卒に命じ陴（城上の壁）に登らしめ旗幟を張り弓銃を列し拒守の勢を為す。昌幸、之を望見して曰はく「真に吾媳婦（息子の嫁）なり」と。遂に信仍と去りて上田城に帰り守禦の計を為す。徳川記・大全・餘史・合戦誌・松栄紀事。賜書及小縣郡、拠古簡雑纂

臣按ずるに、眞田昌幸の設心（先見の明）は孟門大行の険に於て甚だし。父子既に相保たず。豈に能く祖孫を存せんや（大切に思おうか）。信幸夫人、能く其謀を祈（折カ）る故に信幸をして城塁を失はざらしむ。女丈夫と謂ふべし。信幸台廟に従ひ上田を征するに及び、夫人以為へらく、父子嫌隙を構へ兄弟仇讐を為すと。兵、室家を念はば則ち戦必ず勗（＝勖）めず。乃ち保母に謂ひて曰く「良人在らず。以て岑寂（留守居）を慰む無し。須らく将士の妻子をして此に来せしむべし。妾、彼曹と共に処守の情を叙さん」と。出で之を告ぐ。妻皆喜び各其子を携へ城に入り起居す。夫人接遇すること款曲（ねんごろ）に之を留め遣はさず。其実は以て質

と為すなり。是に由り士心純一に以て返顧の心無くして、力を用ゐ上田城を攻むるを得。其機警人に過ぐること此の如し。宜(うべ)なるかな、昌幸の計に堕ちざるなり。世伝ふに、昌幸、長子を愛せずして少子を愛し遂に父子帰を殊にするに至ると。然れば其犬伏に在り去就を議るに方(あた)り、昌幸、彊(し)ひては信幸を留めず之をして各其志を行はしむ。而して信幸、終に能く建功策勲し父の罪を贖ひ以て茅土（領地）を子孫に伝ふるを得。亦既に忠且孝なりと謂ふべし。

福島正頼、小山より還り長島城を守る。神祖、其兵の寡きを以て山岡道阿弥をして之を援けしむ。敵将原隠岐守、大田城に拠り以て長島城を窺ふ。正頼堅守し之を拒ぐ。家忠日記 九鬼嘉隆、既に稲葉道通と難を構ふ。其子守隆小山に在るに乗じ鳥羽城に拠り沿海を寇剽す（おびやかす）。道通、小山より還り兵を率ゐ之を攻む。嘉隆、険に拠り之を拒ぎ、道通、敗れ還る。嘉隆巌手城を攻め、道通堅守す。嘉隆、分部光嘉来援するを聞き兵を引き還る。徳川記・合戦誌・餘史○餘史曰、神祖以本多隼人為使諭嘉

隆。嘉隆降、猜疑殺隼人。神祖大怒謂守隆曰、吾欲汝父子同心尽忠於吾。而何意、大隅守兇逆如此。罪不容誅。然吾猶忍之。汝須帰藩諫父。若不従諫、宜与父共反。吾不復懟（うらむ）汝也。守隆拝命曰、下官、聊有所志。証以他日。遂従池田輝政出小山。按ずるに、守隆、諸将と小山を出で江戸に還る。又諸将と江戸を発し吉田に赴く。嘉隆・道通争戦の事未だ小山に達する能はず。神祖面命の理無し。或は守隆、江戸を発するの後、神祖使を遣はし之に命ずるか。未詳。附し以て考に備ふ。神祖、奥平貞治をして黒田長政を召さしむ。貞治、之を武州厚木に及ぼす。長政、小山の営に還り至る。神祖、軍事を議り之に謂ひて曰はく「福島正則の心術叵測（はそく）なり（はかりがたい）」と。対へて曰はく「左衛門大夫、雅（もとより）閣下に帰心し且三成と隙有り。敢へて其佗（他）無きを保つ。若し前に却却たらば宜しく之を苦諫すべし。請ふ、慮を為す勿れ」と。神祖、悦び手づから首鎧を賜ひ発に臨み又鞍馬を賜ふ。大全 田中吉政、其子長顕を以て質と為し将に大城に納めんとす。長顕、其征西に従ふを得ざるを憾み、部兵三十人ばかりを率ゐ江戸を出づ。吉政、大いに驚き使を池田輝政に遣はし之を留めしむ。輝政、長顕の向背（ようす）何如な

るかを知らず。急ぎ使を吉田に馳せ処守の臣竹村彦右衛門をして之を邀(むか)へ留めしむ。彦右衛門、長顕将に本阪を過ぎんとするを聞き、邑民をして紙旗を多く斉(そろ)へしむ。之を本阪嶺上に建て、山下に往き之を迎ふ。長顕、強ひて過ぎんと欲するも紙旗を望見し、以為へらく、過ぐる能はずと。牛窪を過ぎ命を俟(ま)ち自殺せんと請ふ。彦右衛門、聴かず之をして吉田城に入らしむ。問答の間、輝政の使又至り報じて曰はく「長顕の心迹(せき)(佗)使する無し。宜しく其過ぐるを聴くべし」と。是に於て長顕、本阪を過ぐるを得岡崎城に入る。大全、本書曰、七月晦黎明、長顕出江戸。按ずるに、是時、吉政・輝政未だ江戸を発せず。蓋し長顕先んずること一日、江戸を発し吉政も又輝政に後れて発す。故に使を遣はし之を止むるなり 生駒一正・蜂須賀至鎮、当に諸将と征西す。神祖、一正の父近世・至鎮の父家政、石田三成に党するを聞き之を留め遣はさず。近世・家政、使を遣はし、二人已むを得ず彼(被)駆使(駆使せられ)実に叛心無しと謝す。神祖、之を聞き一正・至鎮の従軍を許す。戸川達安・宇喜多孝親、宇喜多秀家の旧臣たるを以て、

神祖、之を疑ひ遣はさず。二人、固く力を効(つく)すを請ふ。亦之を許す。是に於て孝親、阪崎出羽守と更称す。一正・至鎮・達安・孝親・小出吉政・寺澤廣高・亀井茲矩、皆誓書を献じ従軍し質を小田原城に納む。九鬼守隆、諸将と江戸を発し吉田に至る。将に海路を取り鳥羽に還らんとす。其父嘉隆、之を拒み内れず。守隆、使を遣はし嘉隆に謂ひて曰はく「内府、大人(たいじん)（父上＝嘉隆）、反徒に党すと聞き、児をして同じく反し以て大人の忠に従はしむ。然れども児三成に党し天下を擾乱せんと欲せず。固より内府に竭力せんと欲す。故に小山に在り。諸将と同じく誓書を進む。今兇徒を討平するために此に来たり。敢へて大人を触冒（権利を侵す）せず。願はくは大人阪(反)図せよ。内府に服従せば則ち幸孰れか甚だしからん」と。嘉隆曰はく「汝既に質と誓書とを納む。宜しく忠を内府に尽すべし。吾も亦汝を殺すに忍びず。若し汝妄(みだ)りに発兵攻城せば則ち堀内安房守と悉力拒戦すべし。其鋒鏑(てき)（武器）に隕命（命をおとす）するよりは屯兵し以て時勢を観るに如かず」と。守隆、已むを得

ず畔乗の旧墨を修筑し之に拠る。諸書畔乗作畔桑、今拠大全訂之　菅平右衛門、尾張参河海辺を寇め将に伊勢浦に還らんとす。守隆、舟師を以て逆戦し之を破り敵船三艘を奪ふ。平右衛門敗れ還り、守隆、使を遣はし之を神祖に告ぐ。大全、此非是日之事、拠守隆与諸将発江戸、欲其事実接続。故係于此○大全与一説曰、氏家内膳正自桑名出舟師戦于畔乗海上。守隆破之奪船三艘。若以秀家之命出師守（乎）真偽未詳　大阪の敵将合図し伏見城を攻む。

十五日より是日に至るも抜く能はず。

晦、長束正家の兵浮貝藤助　合戦志浮貝作鵜飼。国音相近。今従大全・松栄紀事　宇喜多秀家の命を受け箭を射、深尾清十郎の営に飛書し、永原・甲賀の士卒に告げて曰はく「汝曹固守し降らずは則ち長束大蔵大輔、汝の妻孥を捕へ諸水口に磔（磔カ）せんと欲す。若し内応を為し城を焚かば則ち啻（ただ）に汝の妻孥を活かすのみならず亦重く之を賞す」と。甲賀の兵之を見大いに驚き、永原十内・山口宗助等同族四十余人期を刻み火を縦ち内応を為す。島津惟新、兵を進め城に迫る。鳥居元忠、開門出戦す。惟新

敗走し敵内応を恃み夜に入り又来攻す。城兵拒戦す。夜参半ば松丸火起つ。浮貝藤助、期に応じ入城す。豊臣秀秋、大軍を率ゐ継進し城中火熾なり。創業記・家忠日記・大全・餘史・合戦誌・関原軍記・慶元記・松栄紀事

八月朔、征西の前鋒福島正則江戸を発し、軍監井伊直政・本多忠勝及び池田輝政・其弟長吉・浅野幸長・細川忠興・田中吉政・藤堂高虎・本多忠政・其弟忠朝・京極高知・中村一榮・徳永法印壽昌・寺澤廣高・黒田長政・加藤嘉明・山内一豊・堀尾忠氏・稲葉道通・古田重恒・本多利朝・亀井茲矩・筒井定次・有馬法印・其子豊民(氏)・織田有楽・金森可重・一柳直盛等相継して総五万余人を発す。関原軍記曰、七万六千騎。今従徳川記・松栄紀事○家忠日記曰、十三日、諸将発江戸。徳川記曰、七月二十八日、諸将自小山経武蔵野直向関西。餘史・松栄紀事不日。今従創業記・合戦誌

是日、伏見城陥つ。豊臣秀秋・島津惟新、名越丸を攻め之を抜く。松平近正戦元(死)す。秀秋の兵比奈津角助・田島勘左衛門相共に近正の首を獲り之を争ふ。秀秋、二人

の功と定め為すも角助服さず。然れども秀秋の命を以て復び争ふ能はず。家忠日記・大全・合戦誌・餘史

臣按ずるに、関原記・大全 此の事を論じて曰はく「長湫の戦に森長一の兵山田八右衛門、第一槍を為 すも功を第二槍千田主水に譲る。主水、固く己の功の八右衛門に及ばざるを争ふ。小田原の役に前田利家の兵雨森弥太郎、級を獲ること第一。之を利家に献じて曰はく、臣未だ獲首せず、太音藤蔵、獲首を高く呼称すれば、則ち今日の戦功当に藤蔵を以て第一と為すべしと。其余の近世の戦に功を譲る知名の者五六人に過ぎずして勘左衛門の如き者勝(あ)げて計ふべからず。此皆武人矜功衒名の流弊なり」と。臣按ずるに、元和元年、難波の役に松平政宗・浅野長重の兵も亦能く譲る者有り。観る者併せ考ふべきなり。

甲賀佐左衛門戦死す。合戦誌 敵、松丸・名越丸を陥し島津惟新、郭門より城に入る。松平家忠士卒を指麾し槍を揮ひ突戦すること三たび。惟新の部将別所下野と闘ひ

左脇に傷す。敵兵麕(むらが)り至る。家忠、其進む者を撃ち之を却け遂に自殺す。下野、其首を獲る。時に年四十六。従兵八十五人皆戦死す。創業記・家忠日記・餘史・合戦誌・慶元記・松栄紀事○合戦誌曰、鳥居元忠開門出闘。敵兵敗走。樫原彦右衛門・川瀬左馬助横撃破之。元忠兵敗而退。拠大全非元忠而松平家忠也。敵将亦非彦右衛門、左馬助。見上文七月十五日。故不取 内藤家長、素(もと)射を善くす。西城門を開き敵を射五六人を殪す。敵猶ほ競進す。家長、部将安藤治右衛門定次に謂ひて曰はく「子、息小一郎 安藤定次木工之助墓（基）能子、合戦誌曰、小一郎名幸長。未知是否 と力戦し敵を拒げ。吾其間を伺ひ引決（自裁）す」と。乃ち退き城に乃(入)り鐘楼に登り薪を積み、其兵原田某に謂ひて田(曰)はく「汝須らく囲を脱し関東に往き両公及び左馬助 家長長子政長 に告状すべし」と。遂に自殺す。時に年五十九。原田某、火を縦ち其屍を焚き囲を潰し関東に出奔す。家長の次子小一郎年十六、垣見家純と拾(格)闘し彼(被)創る（創せらる）。父と同死せんと欲すれども鐘楼火熾(さかん)なりて近づくを得ず。甲を卸し自屠し火中に跳び入りて死す。安藤定次・松井茂兵衛・長谷川吉左衛門・

原田三九郎・糟屋作十郎等十六人力戦して死す。大全　駒井直方、敵に混じ脱却するを得。佐佐木系図。諸書不載石部小一郎之生死。今無所考　巖間兵庫戦死す。佐野綱正大銃にて敵を防ぐ。銃逆裂し焚死す。合戦誌・餘史・松栄紀事○餘史・合戦誌並曰、神祖東征、使綱正留守大阪西城護侍女。毛利輝元迫使出城。綱正謂不与軍事非吾志也。乃使吏卒護侍女、潜居河内村室入伏見城、与諸将守城死。其後、神祖咎其不護侍女、没綱正采邑別賜其子主馬禄五百石。大全曰、綱正戦死或云出走。按ずるに、神祖、其子主馬に録すれば、則ち死する事明らかなり　西城既に陥ち鳥居元忠牙城を固守す。部兵進みて曰はく「敵兵城中に充塞し復びは拒ぐべからず。請ふ、速やかなる自裁を」と。元忠曰はく「凡そ将たるもの、運尽き命窮まりて自殺するは固より其所なり。時未だ至らずして速やかに死するは亦貴ぶ所に非ず。敵一人と雖へども之を殺す、是れ吾志なり。我年既に邁(ゆ)くを恨む。往年三方原の戦に被創し歩趨(すう)（足どり）便ならず　按ずるに、元亀三年三方原の戦に元忠股を傷す。天正三年、諏訪原城を攻め銃其股に中り創し愈跛と為る。蓋し再び被創するなり　今当に分に随ひ効死（死力をつくす）すべし。等死、其光明俊偉を要するのみ」

と。豊臣秀秋の隊将松野主馬、其兵をして火箭を楼櫓に射せしむ。元忠、加藤九郎右衛門をして之を撲滅せしむ。九郎右衛門火箭に中り濠中に堕つ。火勢益猛し。元忠、事為すべからざるを見、部兵二百余人を率ゐ開門出戦す。縦横に馳突し敵を却くること七八次。部兵杉浦河内・鈴木六左衛門・鳥居権平・鳥山喜大夫等五十余人戦死す。元忠力疲れ眉尖刀を杖つきて憩ふ。敵兵雑賀孫市重朝（初称鈴木孫三郎、本貫紀州雑賀、唯嫡子一人、称雑賀氏。余皆称鈴木氏。撰餘史者不知此事作雑賀孫市・鈴木孫三郎二人相共撃元忠。大全載一説曰、孫市、改姓名曰桑原忠兵衛、皆非也。重朝、事秀吉公有勇名、後事水戸威公、子孫見存（現存））進み将に之を撃たんとす。元忠自ら呼びて曰はく「我、城を守る大将鳥居彦右衛門なり。来我と決せよ」と。重朝、横鎗して曰はく「願はくは子（し）の首を授けよ。以て我が名を揚げん」と。元忠之を然りとし甲を卸し腹を刳（えぐ）り死す。時に年六十二。重朝、終に其首を獲る。（家忠日記・徳川記・松栄紀事○慶元記・餘史並曰、元忠欲与内藤家長同死、往松丸。家長曰、守此城者吾子与吾也。胡為捨牙城来之。元忠然之。欲還牙城、敵兵充塞不得入。遂力戦自殺。大全駁此

説曰、元忠初与諸将約各守其所。不互相救牙城牢固。何為捨之来于西城耶。其説是也。故不取 上林竹菴、宇治茶商なり。元忠・家長を来訊し敵、将に来攻せんとするに及び同じく城を守らんと請ふ。元忠・家長曰はく「汝士人に非ず。此を去る、何ぞ不可なること有らん、宜しく出で去るべし」と。竹菴曰はく「品流（家柄）殊なると雖へども志操豈に士人に媿（は）ぢんや。久しく閣下の恩眷（こうむ）を荷る。今之に報いず更に何れの日を待たん」と。乃ち紅を以て抹額（まつこう）（はちまき）として中（あ）て兵を領し大鼓丸を守り、力戦し死す。乱平し神祖其志を嘉し其子に禄五百石を給ふ。世（よよ）宇治縣史と為す。餘史・合戦誌・松栄紀事 城兵の死者一千八百余人。敵兵の死傷二千五百余人。大全 宇喜多秀家、鳥居元忠・松平家忠・松平近正の首を大阪に送る。秀頼、将士の功を賞し差有り。毛利輝元・増田長盛、秀頼に代はり三将の首を検し之を大阪京橋に梟す。大全○餘史曰、石田三成載元忠・家忠・家長・近正首於盤、梟於京橋。松栄紀事曰、家長首不知所在。按ずるに、家長、積薪焚屍すれば則ち所在を知らざること、実を得ると為す。今之に従ふ 深尾清十郎亡げ去る。按ずるに、清十郎の死生諸説紛紛

たり。家忠日記・餘史並び日はく之を捕へ斬ると。関原外記曰はく清十郎、江州代管（官）なり。三成、江州土人の妻子を捕へ之を磔す。清十郎其惨酷に勝（た）へず。故に内応を為す。城陥ち之を擒ふる後、秀秋の部将村上宇兵衛之を幽す。此説実に近し。蓋し秀秋の帰順後、神祖之を獲り処刑するなり。故に今松栄紀事に従ひ亡げ去ると但書す

初め豊臣秀吉伏見城を築く。玉楼金殿壮麗天下に甲（第一位）たり。是に至り一時に灰燼す。奥州軍記 其地規模広大に門巷頗る多し。兵寡く守る能はず。元忠・家長相議り松丸橋を撤し守禦の計を為し之を小山に告ぐ。神祖、之を聞きて曰はく「凡そ城守は無橋の処架橋すべし。昔、土佐坊正俊、堀河館を夜襲す。源義経開門し敵を待つも亦此意なり。今、橋有り、之を撤し何を以て能く守らん」と。数日せず城陥つ。果たして料る所の如し。大全・合戦誌○関原外記曰、元忠継室、馬場美濃女也。在矢嬌城。熟見伏見城図、流涙曰、城大兵寡。必不能守。城破則名越丸必先破矣。果如其言。大全駁此説曰、伏見城陥深尾清十郎内応之故而非地利不完因。此好事者之説也。故不取

臣按ずるに、生を舎て義を取る、危きを見命を致す、固より人臣の大節にして

能く之を踏む者鮮(すく)なし。鳥居元忠・松平家忠・内藤家長・松平近正、留寄の任を受け伏見城を守る。四将天地に誓心し大敵を捍禦す。孤城援無く内に反者有り。勢蹙(ちぢ)み力弾く（くだける）。而れども志気撓(たわ)まず。創を襄(つつ)み槍を揮ひ正に仗(よ)り斃(たお)る。其忠勇壮烈の気炯(けい)上（輝くさま）し霄(しょう)霄漢（はるか大空）を貫く。真に以て綱常（人の世のふむべき道）を植えて世の教を扶(たす)くる（＝扶植、勢力や思想をうちたてる）に足るなり。家長の子小一郎弱齢にして勇決（決断力に富む）、爾(そ)の所生を忝(はずか)しめずと謂ふべし。或は咎むるに、元忠、権変（臨機応変）に通ぜずして豊臣秀秋・島津惟新の帰款を拒み以て城陥るを致すと。非ざるなり。元忠豈に知らざらんや、二将入り守らば則ち城以て全うすべく、衆生を以て危を転じ安たるべきを。誠に慮ふ、敵詐謀多しと。万一欺かれなば則ち上以て神祖に報ゆる無く、下以て士卒を見る無し。寧(むし)ろ元を喪ふとも辱を受けず。故に大経（大きな筋道）を守りて為に動かず。此乃ち人臣の勧たる所以にして、或者の権変の説、後世に垂戒する所以の者に非

ざるなり。家忠の三世節に死すること、世に其比無し。祖好景中島に死し、父伊忠鳶巣に死すも家忠の死に従ふを許さず、酒を釃(つ)ぎ別れを為し忠義の言を以て勉む。家忠克く遺訓を守り家声を墜さず。壮烈殆んど将に之に過ぎんとす。林学士怒(怨)し之を碑とし宋の康保裔三世の殉難を以て擬すること宜(うべ)なり。四将の子孫世(よよ)方面に居し以て藩屏（守り）の寄を膺(う)く。旌忠褒義（忠義をほめたたえる）酬庸の典、既に厚くして四将の烈不朽に垂(なんなん)とす

堀秀治、東征の命を奉ず。其弟蔵王山城主美作守親長・其宰三條城主堀直政及び直政の長子雅楽助 後襲称監物・次子阪戸城主丹後守直奇 諸書多作直寄、今従直奇子書花押訂之・本荘城主村山義明・新発田城主溝口秀勝・下倉城主小倉主膳・橡尾城主神子田八右衛門等兵一万五千余を率ゐ津川口に至る。神祖将に西上せんとするに及び、秀治を諭し兵を引かしめ各其城を守らしむ。直政、秀治に従ひ春日山城に還り雅楽助をして三條城を守らしむ。上杉景勝、越後上(土)人を扇誘し挙兵せしめ郡県を侵

掠す。越後人其旧主たるを以て多く之に叛応す。賊帥九(丸)田右京 合戦誌作刑部今従大全・齋藤右衛門・柿崎某等三千余人を率ゐ寇む。下倉城主小倉主膳開門出戦す。堀直奇阪戸城に在り、之を聞き救ひに出でんと欲す。其臣諫めて曰はく「土寇競起し管内党の者有り。間を伺ひ来攻せば則ち城必ず危し。宜しく将に命じ之を救ふべし。明公、城に拠り固守せよ」と。直奇曰はく「然らず。我此地を領す。未だ久遠ならずと雖へども務めて恩恵を以て士民を撫し未だ嘗て其下を侵刻せず。何の怨讎(おんしゅう)有りて賊に党し我を攻むるや。儻(も)し賊来攻せば則ち下倉は此地を去ること僅か五里。星夜馳せ帰り之を撃破すべし」と。

二日、直奇兵一千八百を将ゐ奔り之を救はんと赴く。未だ至らざるに主膳、力戦し死す。従兵の死者五十余人。直奇の臣途に城陥つるを聞き又諫めて曰はく「賊其勢に乗り必ず阪戸を攻めん。宜しく兵を還し城を守るべし」と。直奇曰はく「今戦はずして退かば則ち世人必ず謂ふ畏縮し逃げ去ると。且、賊来攻せば猶ほ之れ

可なり。若し来攻せずんば何の面目有りて人に見(まみ)えんや。兵血刃せずして徒らに帰去するは我能はざるなり」と。益(ますます)之に馳せ赴く。賊既に下倉城を抜き勝ちに乗じ之を侮り陣を張り以て待つ。直奇、旗を進め奮撃し之を大破す。賊師丸田右京を斬り其余三百余級を斬る。齋藤・柿崎等敗兵を率ゐ四日市河水を渡りて陣す。直奇、又之を撃ち敗る。賊、田川に奔る。直奇、追撃し又二百余級を斬る。部兵を分け主膳の残兵と下倉城を戍る。翌日、捷を小山・宇都宮に報ず。神祖・世子書を賜ひ其功を褒む。神祖、西尾吉次をして諭旨せしめて曰はく「賊又来侵せば須らく眞田伊豆守・牧野右馬允・本多豊後守・平巌主計頭を遣はし以て之れを勦(ほろぼ)すべし」と。大全本書曰、一説会津之兵与丸田・齋藤等攻下倉城質之。上杉家士報曰、唯有直江山城守攻山形、其余景勝未嘗出兵。又一説、丹後守馳至下倉城告来援。主膳曰、君弟観我撃賊今破走之矣。既而直奇進兵、主膳不待其来救而戦死。二説未知孰是。今、按ずるに、合戦誌も亦此二説と同じ。附し以て考（こう）に備ふ 齋藤右衛門・柿崎某等敗兵を集め下田山に拠る。柵を立て自ら固む。堀親良、之を撃却し数十

級を斬り捷を小山に告ぐ。神祖、書を賜ひ之を褒む。大全挙一説曰、丹後守聞賊拠下田、張陣相対。有甲士九人取田間路出敵之右連発鳥銃。敵兵騒擾。甲士一人秉白旄麾兵。丹後守之兵争進撃破之。斬一百七十余級。秉旄（旗をもつ）者即丹後守也。又云、斬齋藤・柿崎二人。今按ずるに、合戦誌書く所も亦同じ。大全又云ふ、上杉謙信の驍将に柿崎和泉有り。信長公に通謀するを以て、謙信之を誅す。此れ所謂柿崎某なり。豈に其子孫越後に在り乱を作（な）さんや。亦附し以て考に備ふ　村上義明、溝口秀勝に牒し土寇を討たんと欲す。秀勝七百余人を率ゐ出で之を勦す。賊帥九田（丸）・廣瀬・萬貫寺等氷原に逆戦す。秀勝之を撃破し文陀川を渉り五泉に至る。賊寨を築き固守す。兵三百を蘆葦叢中に伏せ以て之を待つ。義明・秀勝合兵二千、伏兵を殴（う）ち之を却く。其寨を急攻し之を破る。一百五十余級を斬り橋本に進み至る。賊又塁を築き拠守す。義明・秀勝又之を撃破す。三條城を距つること二里、軍を駐す。賊、三條城を囲むを聞き、義明諜を遣はし援を告ぐ。堀雅楽助、二人の来救を聞き兵を率ゐ出城し賊と戦ひ大いに之を敗り数百級を斬る。二人、勝に乗じ兵を進む。賊悉く潰走す。堀直政、

賊三條城を攻むるを聞き兵を将ゐ春日山を出で柏崎に至る。捷報至り兵を引き春日山城に還る。下倉之戦以下徳川記・合戦誌・餘史・慶元記・松栄紀事皆有其事而大全叙事計悉。今従之 是に先んじ、前田利勝、弟利政を金沢城に召し議りて曰はく「去年大老奉行、我を内府に搆（＝構）ふ、既にして悪むべし。今大事を挙げ我をして与知せしめず。其意知るべきなり。故に内府に属し以て勝敗を一戦に決せんと欲す。子（し）の意何如」と。利政曰はく「天下中分し私を為し、怨を搆ふれば則ち当に内府に属すべし。若し嗣君の為にせば当に従ふ所を択ぶべし。宜しく使を大阪に遣はし挙事の由を審問し然る後に決議すべし」と。利勝曰はく「近年諸将の心を観るに実に嗣君の為なる者断じて一人も無し。揚言之を為し、其実皆私を齊せんと欲す。羽柴加賀守以下 丹波長重、秀吉公賜相（羽）柴氏故称之 辺鄙の諸将に至るまで皆其の姦謀を知らず。一旦惑はされ彼輩に党すと雖へども終に必ず悔悟し以て内府に従はん。子宜しく勉めて我言に従ふべし」と。利政已むを得ず之に従ふ。利勝喜び利政をして能登に還

し以て起兵せしむ。宇喜多秀家・毛利輝元、書を利勝兄弟に遣はし大阪に帰らしむ。利勝従はず。利政、其臣前田播磨守を七尾城に留め兵を率ゐ金沢に至る。利勝、其臣高畠石見を以て金沢城に留守せしめ利政と兵一万八千余人を合せ金沢を発し、湊川・手取川を渉り三堂山に陣す。合戦誌・慶長一説記作三田山、三堂、三田、国音相近。今従大全○合戦誌曰、初利勝母・妻在大阪。去年利勝取之帰藩而留利政之妻於大阪。故利政怨之。称病不出。宰臣諫之。利政不得已使伯父前田播磨将兵三千人従利勝以攻大聖寺城。拠家忠日記・慶長記・大全等曰、書此時利政実従利勝攻大聖寺城。而利政称病不出者、是年九月利勝再起兵攻小松城時事、而合戦誌誤矣。故不取 利勝使を小松城に遣はし丹羽長重に帰款を勧む。長重聴かず。利勝、利政と議り小松城を攻めんと欲す。将校諫めて曰はく「小松は堅城なり。且兵多く之を攻むるは未だ下すに易からず。大聖寺城を攻むるに知(如)かず。城、険しき地勢と雖へども完固ならず。且兵寡し。今不意に間道より出で之を攻めば則ち城必ず抜くべし。大聖寺既に陥ちなば則ち小松も亦戦はずして下るべし」と。利勝之に従ひ乃ち岡島備中・不破

大学を三堂山に留め小松の兵に備へ前鋒木葉村に至る。慶長一説記、大学作彦三。按ずるに、不破彦三、利家の時より常に先鋒を為す。蓋し称を更ふるなり。今大全に従ふ　丹羽長重、利勝大聖寺に向ふを聞き兵士を漁船二十余艘に載せ湖水に泛べ以て行く。前鋒之を覚らず木葉潟を過ぐ。小松の兵、銃を発し横から之を撃ち、死傷頗る多し。利勝、之を聞き神尾図書・上阪又兵衛等を遣はし之を救ふ。水陸に銃を放ち相争ふ。小松の候騎利勝の兵を見、御幸塚に還る。誤り以為へらく敵我の帰路を邀(また)むと。馳せ長重に告ぐ。長重使を遣はし兵を収む。故に利勝、軍を進むるを得松山に至る。

三日、利勝・利政兵一万五千を分け三隊と為す。按ずるに、利勝、金沢を発し、兵一万八千有り。蓋し三千を留め小松城に備ふるなり。又按ずるに、諸書七月二十六日利勝金沢を発し、二十七日三堂山に至り八月朔三堂山を発し松山に至ると。今事実接続せんと欲す。故に日を係けず　前後より城を攻む。山口宗和の子右京亮　大全云名元和.合戦誌作脩弘。未知孰是　兵五百を率ゐ南郷を出て銃を放ち利政の陣を撃つ。利政死傷を顧みず進み戦ふ。右京亮大聖寺城に引き入る。利政之を急撃

す。右京亮鯰橋に至り還り闘ふ。利政之を撃破す。敵兵一町ばかり退き、右京亮再び還り闘ひ死を決し相争ふ。両軍戦ひ疲れ交綏（こもごもやす）む。大全・合戦誌・餘史

是日、神祖、書を脇阪安治に賜ひ其通款を嘉す。家忠日記

四日黎明、利勝・利政又進み城を攻む。城兵一千五百人決死拒戦す。金沢の兵鐘丸に進み入る。利勝の隊将山崎長門初称勝兵衛、剃髪号間齊。大全曰、名長徳横山長知・大田但馬土方雄久弟出継大田氏奥村河内・村井出雲・利政の隊将高山南坊初称右近、摂州高槻城主、秀吉公以其崇奉天主教、塙（謫）于加賀。号南坊大盧（虚）。神祖教（放）之阿嫣港、事在十九年、徳川歴代云名友祥、或云長房。未知孰是富田下総・長（ちょう）九郎左衛門連龍名拠大全長安藝守兵を督し奮戦し互に死傷有り。藤掛豊前善く射し鐘丸の屋に上り危に騎し箭を放つ。生田四郎兵衛・西村右馬助も亦銃を放ち敵を殪す。山崎長門の次子勝兵衛、鐘丸の守将蒔田次郎兵衛と馬上に相ひ戦ひ次郎兵衛を斬る。鐘丸既に陥ち宗和父子牙城に退き入り悉力拒守す。我兵蟻附（群がり集まる）し之を破る。右京亮自ら其名を呼び力（刀）を

抜かずして首を授く。山崎長門の兵木崎長左衛門之を獲る。宗和、従兵をして火を縦たしめ城を焚き自ら屠して死す。両日の戦に城兵の死者八百余人。合戦誌曰、五百四十四人。大全曰、闘士八十余人至歩卒奴余凡八百余人。今従之。合戦誌又云、五日城陥。按ずるに、慶元記、八月二十六日利勝金沢を発し、九月四日大聖寺城陥つ。五日浅井畷に戦ふと。皆差一月。今従家忠日記・徳川記・大全・餘史

我兵の死傷九百余人。大全○合戦誌曰、山口玄蕃遣使小松城曰、大聖寺城浅溢難守。願、入貴藩得守一方。長重諾。八月朔、玄蕃率兵百五十人来于小松。長重饗之、贈短刀。玄蕃亦贈短刀于長重之姪五郎助。饗畢、授所守地、其地非要害。玄蕃怒還大聖寺城。大全駁之曰、諸書皆有此説。按ずるに、山口父子強将なり。応に命を稟（う）くる所無くして己の城を捨てて出で他城を守るべからず。此の後、人之を伝へ聞く謬なり。一説又云、長重与玄蕃納金沢之兵来攻則我必救之。聞利勝来攻、長重率兵出至働橋、見大聖寺城煙起知其既陥還軍。按ずるに、長重、小松の兵を救はんがために軍を出さば則ち或は之有らん。玄蕃と約するを以て出で之を援くるに非ざるなり。又云、鐘丸既陥、玄蕃乞降。利勝兄弟不許。遂自殺。按ずるに、三日鯰橋の戦に勝負相半（なか）ばなり。玄蕃若し貳心有らば則ち宜しく此時を以て和を請ふべし。応に勢屈し降を乞ふべからず。蓋し山口父子皆秀吉公の恩に感じ死を以て之に報

いんと欲す。後年大阪の戦に次子左馬助弘定決烈、其兄右馬亮に酷似す。人皆之を称す。乞降の説、信ずるに足らず。此論是なり。故に皆取らず 利勝・利政、諸隊将を召し其功を褒め、城中の金銀を分け給ひ以て戦士を賞す。初め利勝松山に屯す。大聖寺の農商皆逃散す。利勝、人をして慰諭せしめて曰はく「我、敵将を取り汝等を戮さず。宜しく各本業に還るべし」と。邑民大いに悦び僧徒祠官土宜（産物）を捧げ来謁す。安堵すること故の如し。利勝、使を遣はし捷を関東に告ぐ。篠原出羽・加藤図書を留め大聖寺城を守り進軍し越前を経略す。大全 是に先んじ、大谷吉隆、此の国を徇（めぐ）る。毛利輝元、京極高次を以て将と為し、吉隆を軍監と為す。朽木元綱・脇坂安治・其子淡路守安元・戸田武蔵守重政・平塚因幡守為廣・赤座久兵衛等之に従ふ。兵合せ二万余騎越前敦賀に屯す。其党青木紀伊守一矩、北荘城を守り罹疾す。

是日、吉隆敦賀を発し鯖並邑に至る。一矩檄を飛ばし告ぐに、「大聖寺城陥ち利勝兵を進め将に北荘城を攻めんとす。宜しく急ぎ之を救ふべし。事若し遅緩せば則

ち城保つべからず、棄てて走げざるを得ず」と。吉隆の兵皆笑ひて曰はく「紀伊守二十万石を領し、其兵幾んど一万に及ぶ。且主戦を為すに利勝兄弟一万五千の兵を畏る。救を我に求むるは何ぞ其怯たるや」と。吉隆之を然りとせず、出で之を救はんと欲す。時に、堀尾吉晴出で浜松城に在り。姪宮内及び家臣堀尾勘解由をして越前国府城を守らしむ。為廣・久兵衛、吉隆に謂ひて曰はく「府城を攻めずは則ち前後に敵を受け進退必ず難し。先に府城を抜き然る後に北荘を救はば則ち兵利有り」と。吉隆曰はく「然らず。兵を堅城の下に頓(とど)めて北荘城陥ちなば則ち丹羽長重孤立失勢し、且我兵損多し。縦ひ兵を損ぜずして之を抜くも、須らく四五百騎を留め之を戍るべし。勢分かれ兵寡く大敵に対し難し。今、府城を攻めずして敵をして之を守らしむるは、是我に代はる留守なり。北地悉く定めば則ち府城攻めずして自から抜く。此れ戦はずして勝を制するの術なり。機迅速に在り。遅留すべからず」と。登時（その時）兵を発し其夜五更北荘に至る。家忠日記・大全・合戦

誌・松栄紀事　佐竹義宣、上杉景勝に通謀す。神祖の東征を聞き兵四万を将ゐ水戸城を発し石那阪を過ぎ多珂郡に至る。其父義重雅（もと）より神祖に帰心す。其族東在（左カ）近大夫政義を以て使と為し禍福を以て諭す。義宣已むを得ず兵を引き城に還る。大全神祖、島田利政を水戸に遣はし義宣に譲（せ）めて曰はく「曶（さき）に、中山道に兵を出し以て会津を攻むるを命ず。而るに今に至り未だ一兵も発せず反りて守禦の計を為す。聞くに石田三成関西に反すと。吾今班師し之を撃つ。卿、前前（衍字）約を守れ。速やかに出兵し景勝を攻め任子を送るべし」と。義宣曰はく「僕、閣下と素睚眥（かいさい）の怨み（わずかな恨み）も無し。豈に三成に党せんや。然れども妻孥質せられ大阪に在り。今質送るべく無し」と。餘史曰、義宣以父常陸介義重為質在大阪為辞。按ずるに、是時義重致仕し大田城に在り。餘史誤れり　諸将其観望を知り之を先撃せんと請ふ。神祖曰はく「京畿、本なり、佐竹末なり。苟くも其本を絶たば則ち末豈に存するを得んや」と。竟に之を撃つを許さず。皆川廣照・水谷勝俊・成田氏憲・那須太郎資晴　二郎資胤子・大田原備前

守晴清（山城守縄清子）をして鍋掛に屯せしむ。松平信一上野布川城に在り以て義宣に備ふ。（餘史・合戦誌・松栄紀事）伊達政宗奥州巌手澤城に在り、相馬長門守義胤（弾正大弼盛胤子）同州中村城に在り。最上義光羽州山形城に在り、戸澤九郎五郎政盛（平九郎光盛子、称右京亮）同州林崎城に在り。平巌親吉上野厩橋城に在り、松平一生同州三藏城に在り。植村泰忠同州勝浦城に在り、鳥居忠政下總矢矯城に在り、松平忠利同州小美川城に在り。以て掎角（きかく）の勢（前後から対応する構え）を為す。（家忠日記）神祖、宇都宮城主蒲生秀行・房州館山城主里見義康・下野黒羽城主岡部長盛・同州佐野城主佐野修理大夫信吉（富田左近将監知信第二子佐野大徳寺子養之）に命じ、兵凡そ二万五千人、参河守秀康を副へ以て上杉景勝に備ふ。（大全）秀行の宗臣蒲生源左衛門郷成（初称伴小阪著勇名。蒲生氏郷召為臣授氏、為家老）神祖に言ひて曰はく「今那須七騎の質を収めん。（蘆野・大田原・那須・福原・千本・大関・伊王野、世謂之那須七騎）彼と兵を合せ、秀行前鋒を為し東山道を扼せば則ち景勝彊梁と雖へども必ず兵を進むるを得ず」と。神祖、之を善しとす。乃ち那

須諸将の質を収め以て秀康の指擇(揮)を受けしむ。餘史・四家合考 乃ち世子を諭し宇都宮城を修繕し東山道より美濃路を径向す。創業記・大全・奥州軍記・慶長一説記 神祖、小山より江戸に還る。合戦誌曰、七月二十八日発小山。蓋 以諸将発小山日、誤為神祖、慶長記・慶元記係二十七日、大全作八月五日、一説八月朔。皆誤。家忠日記曰、在小山九十日、処分東国軍事四日、還江戸。今従之 山城宮内少輔を以て使と為し西征を告ぐ。関西諸将に於ては神祖の城守者と為す。合戦誌・餘史二書並曰、関原乱平、宮内少輔有故収采邑被放。按ずるに、十二年正月宮内少輔、瀧川正弘等と駿府城を修築するを監すれば則ち幾ばくもなく之を召還するか。未詳

六日、石田三成、書を真田昌幸に遣はす。其略田(日)はく「輝元・秀家・長盛・正家・徳善院相議り信州を足下に授け深志に招諭す。 按ずるに、是に先んじ小笠原貞慶、深志を改めて松本と曰ふ。三成其旧称に仍(よ)るなり 川中島・諏訪・小諸及び甲州の諸将、足下の方略に在るのみ。諸将の妻孥皆大阪に在り必ず当に帰すべし。須らく命を拒む者有らば速やかに之を討滅すべし。若し兵力贍(た)らず(=足らず)は則ち美濃将士を遣はし援

を為す。森右近、嗣君を欺罔（ぎもう）し其封邑を増す。罪、誅を容（ゆる）されず。堀久太郎の志大阪に在り嗣君を翊戴（よくたい）（いただく）す。須らく関西に移封すべし。越後を景勝に賜ひ以て其忠を褒むべし。羽柴肥前守の老母及び家臣の質江戸に在り。故に帰順の報未だ明白ならず。今、丹羽五郎左衛門をして出兵し其罪を問はしむ。久太郎をして越中に入れ之を経略せしむ。細川幽齋力屈し生を丐（こ）ふ（＝乞ふ）。故に之を流す。丹後悉く平す。越中守、内府に諂媚（てんび）（へつらう）し恣ままに封邑を増す。其罪軽からず。故に大阪に在る所の妻子を収め之を燔（や）き殺す。按ずるに、此時幽齋田辺城を固守し、小野木公卿と相持す。忠興夫人、貞烈にして自殺し、家臣其屍を焚く。而るに、之を燔殺すと云ふ。下、伏見の諸将の死に至る義、皆三成の侈言（大げさな語）にして事実に非ざるなり。内府の士五百余人西丸に留守す。今之を遂（逐）ひ輝元をして西丸に居せしめ以て之を鎮圧す。諸将伏見城を攻め之を抜く。鳥居彦右衛門・松平主殿助以下千八百人皆誅に伏す。彼輩宮室を踏□（とうせき）（＝藉、踏みにじる）し屋宇を汚穢す。故に火を縱ち之を焚き悉く灰燼と為す。筑紫の諸将佐和

山に在り余の指揮を守る。其余、忠を尽くし誠を輸す者の姓名悉く別幅に具さなり。覧じ訖らば會津に送るべし。但し、會津の往来に書牒務めて慎密を要す。内府、纔かに三四万の兵を以て分け管内十五城を守りて上杉・佐竹と墨を対す。二十日行程を歴、関西に入らんと欲す。其れ能くすべからんや。天下の大名孰か敢へて嗣君を蔑まん。妻子を棄て太閤二十年の恩を忘れて内府去年以来の春遇（特別に目をかける）を慕はんや。儻（も）し内府妄りに西上を意（おも）はば是れ天幸なり。之を尾参の間に邀ち撃ちて殲すべし。前日、水野和泉守、加賀井弥八郎の殺す所となり、堀尾帯刀重創し死に瀕す。中村式部少輔病死す。想ふに足下之を聞かん。内府の勢、日に蹙（ちぢ）みて余の兵勢日に盛んなり。昨、秀元、兵一万余を率ゐ吉川・安国寺及び正家と勢州に赴き鈴鹿関を固む。余も亦近く尾州に往き岐阜中納言に会ひ以て勝算を決せんと欲す。須らく不日にして捷を報ずべし。足下、鋭意進取し以て功効を立てなば則ち賞訾（はか）られず（数えきれない）在り。大阪城中の金銀・火薬、府庫に充牣（じん）

（充満）す。随ひ須らく之を給ふべし。家眷皆平安に、思慮を嬰（めぐ）らす勿かれ」と。（ここまで三成の書）昌幸・信仍書を得大いに悦び守城堡に拠り以て世子西征の路を塞ぐ。

家忠日記・徳川記・大全・餘史・合戦誌・松栄紀事

是日、前田利勝・利政進み加賀・越前の界細呂木に至る。宇喜多秀家・毛利輝元、使を遣はし連名書を斉へ神祖の罪を誣し（うその罪を言う）利勝をして大阪に専心帰府（服従）せしむ。利勝答へず其使を却す。大全　利勝の妹夫中川宗伴、利勝出兵し往訪の路に北荘を過ぐるを聞く。宗伴名光重八郎右衛門重政子、従五位下武蔵守、秀吉公近臣。剃髪号宗伴。諸書或云、宗伴至敦賀被拘。誤矣。今計（訂）之　大谷吉隆之に迫る。書を作し利勝に詒（おく）らしめて曰はく「内府急ぎ関西に赴く。秀家・輝元・岐阜中納言・筑前中納言等の大軍と美濃に戦ふ。東軍の諸将内応する者多し。内府、戦ひ敗れ参州吉田城に入る。故に関西皆内府に敵す。北陸道を平らげんが為に兵船数百艘を気比浦に犠（ぎ）す（船出の準備をする）。近日、将に解纜（かいらん）し（船出をする）北国を攻めんとす。宜しく之れに備ふべし」

と。　徳川記・合戦誌・餘史等諸書皆云、吉隆使宗伴作書曰、　成之党蜂起関西鼎沸（ていふつ）、丹波・丹後・若狭之兵乗戦艦数百艘至賀州宮腰。利勝読之還軍。　按ずるに利勝算定して出軍す。応に此書を見輒ち還軍すべからず。神祖、戦敗るるを聞き、其意大いに沮（くじけ）る。故に軍を還すなり。此書関原の戦に先んずること幾んど一日。然れば利勝、神祖の出軍遅緩たりて前軍の諸将既に江府を愛（発）するを知らず。即ち利勝、必ず謂ふ、神祖も亦当に継発すべしと。故に之を信じて軍を還すなり。今大全・慶元記に従ふ。但し慶元記九月五日に係くるは誤り　宗伴書を善くす。利勝其手迹を見大いに驚き将佐を集め議りて曰はく「金沢の守兵寡少、敵汝（海）路より来襲せば則ち留守の兵之を防ぐ能はずして吾事去る。兵を収め国に還り以て再挙を図るに如かず」と。丹羽長重、其宰江口三郎右衛門正吉　初称傳治、諸書皆云、後更称石見。今質之、正吉玄孫正道、石見　正吉之子而正吉未嘗称石見也　・阪井與右衛門直政・大矢與兵衛に謂ひて曰はく「前日の戦利勝の軍を擾（みだ）すと雖へども赫赫（いちじるしい）の功無し。今出兵し以て余憤を洩らし且山口父子を地下に弔はんと欲す。然れども敵大軍なり。隊毎に対戦せば則ち勝敗料り難し。敵をして軍を過ぎしむ

るに如かず。其の形勢を審かにし以て後軍を撃たば則ち必ず利有り。三郎右衛門宜しく兵を将ゐ之を撃つべし」と。

七日、利勝、将校に令して曰はく「明日将に退軍せんとす。長重出兵し之を邀つは必なり。小敵と雖へども侮るべからず。山崎長門・長連龍・高山南坊・大田但馬・奥村伊豫・冨田下總宜しく大路を経御幸塚に至り小松の兵に備ふべし。義(我)、能登守と三堂に至る比(ころ)、豈(ママ)に軍を働橋に還し、間道を取り以て三堂に会せん」と。

八日五更、長門・連龍・南坊・但馬・伊豫・下總等大聖寺を発し御寺(幸)塚に至る。旦日、利勝・利政も亦大聖寺を発し三堂に至る。諸書作九日。蓋以九日戦于浅井畷誤。為其日。今従大全。按ずるに、餘史九月九日と作すは益誤れり 長門、御幸塚に在り、議りて曰はく「明日軍を働橋の傍山に還す。而るに退かば則ち敵を畏るるに似る。大呂一屋を径浅井に向ひて退くに如かず。」と。退(衍字)歩卒隊長松平久兵衛進みて曰はく「此の如くんば則ち長重忠(志)を得て我必ず利を失ふ。宜しく軍令を守り間道に由り退くべし」

と。長門哂(わら)ひて曰はく「小敵何ぞ畏るるに足らんや。彼若し出躡(じょう)せば則ち大軍にて之を囲み一人として生還せしめず」と。久兵衛曰はく「我、身の為に非ず。特(た)だ君侯の為に計るのみ。小松城兵、婦人・小児の如くんば則ち知る所に非ず。凡そ部将たる者、我、城下を過ぐるを見、安んぞ晏然として出撃せざるを得んや。明日の戦に子(し)能く隊伍を乱さず以て其言を践(ふ)め。我必ず衆に抜挺んで槍を揮ひ以て我志を明らかにせん」と。長門、竟に従はず。久兵衛忿激して出づ。長門、探籌(たんちゅう)（くじをひく）し軍列を定む。第一長門、第二南坊、第三伊豫、第四下總、第五但馬、連龍父子殿を為す。其夜四更、江口正吉、小松を出で桑原に至り伏を設く。

九日五更、金沢隊将御幸塚を発し大呂を過ぐ。正吉銃手をして其後軍を撃たしむ。連龍の隊頗る騒擾す。正吉麾を秉(と)り衆を励まし伏発す。士皆殊死（＝決死）戦ふ。連龍及び其子好連伏に遇ふも少しも沮(くじ)けず声を励まし督戦す。部兵の死傷頗る多し。小松の兵進み連龍麾下に迫る。好連時に年十八、馬を進め将に決死せんとし連龍

も亦馬を進む。父子の兵其馬の銜（くつわ）を攬（と）る。父子怒るも部兵聴かず遂に其馬を回す。正吉勝ちに乗り之を遂（逐）ふ。連龍父子の残兵纔かに二十人ばかり、還り闘ふこと凡そ三たび。長重、市鄽（てん）（店）の屋上に大呂の戦を望見す。阪井直政に命じて曰はく「我軍既に捷せり。汝須らく敵の帰路を邀ち其隊将を斬るべし」と。直政急ぎ小松を発し北浅井を歴、南浅井に至る。連龍の敗走を見、将に之を横から撃たんとす。連龍父子其免れざるを知り志必死を決す。両軍の間に深き沼有り。互に進むを得ず。大田但馬、大呂の戦を聞き浅井に還軍し連龍父子を救ふ。直政、但馬の旌旗を見、督兵競進す。浅井畷は道路狭隘にして但馬の部兵水越縫殿、山代橋に至り馬を下り（拠大全。山代或作山城誤）槍を揮ひ挑戦す。敵兵成田助九郎・安孫子作大夫（諸書作清右衛門。今従大全。蓋更称也）・拝郷次大夫（柴田勝家之士五左衛門子、五左衛門戦死柳瀬）・不破木工兵衛・宮田小兵衛相継ぎて進む。松平久兵衛馳せ至り下馬す。縫殿の前に進み槍を揮ひ自ら第一槍と呼び以て前言を践む。但馬の兵巌井傳左衛門・井上勘左

衛門並び進み、久兵衛と木工兵衛と、縫殿と作大夫と、勘左衛門と助九郎と、傳左衛門と次大夫と、槍を接し相争ふ。但馬、上阪主馬・大野甚之亟をして放銃せしむ。次大夫・木工兵衛鉛に中り斃(へい)す。両軍の士戦ひ疲れ五たび退く。利勝、三堂に在り。之を聞き駿馬に騎り本郷に馳せ至る。山崎長門・高山南坊も亦軍を還し鎌谷に至る。長重の候騎利勝の来救を告ぐ。長重急ぎ小松を出で南浅井江口に軍す。正吉戦勝すと雖へども連龍父子を獲らざるを憤る。兵を進め蓮臺寺山麓に陣す。長重使を遣はし之をして引き去らしむ。正吉固く戦に留むるを請ふ。長重再び使を遣はし之を諭す。正吉兵を引き還る。但馬及び連龍父子も亦引き去る。利勝軍を三堂に還す。長重兵を収め小松城に入る。利勝、連龍父子の力戦を労ひ、松平久兵衛の膽略を賞し擢(ぬき)んじ隊将と為す。家忠日記・徳川記・慶元記・慶長一説記・合戦誌・餘史、事実互有異同。今従大全○大全・合戦誌・餘史並云、松平久兵衛事利家、秀吉公撃島津義久故豊前巖石城力戦有功。利家賞之倍俸二百石給六百石。至此与山崎長門忿争戦于浅井畷接槍著勇。利勝褒之授俸二万石為家老。後更称伯

者

十日、利勝、金沢に還り、始めて宗伴の書敵の詐謀なるを悟る。神祖の西上を聞き大いに之を悔い小松城を攻め以て関西に入るを謀る。堀尾宮内勢屈し府城を守る能はず大谷吉隆に降る。果たして吉隆の料る所の如し。大全・合戦誌・慶長記 初め吉隆入り北荘城を援く。諜連ね来告ぐに「利勝、大聖寺城を抜き勢に乗り来攻す」と。吉隆為に動かず青木一矩に謂ひて曰はく「敵今来攻せば則ち戦はずして曠日（むなしく日をすごす）須らく関西の大軍一挙ばかりにして之を殲すべし。若し彼競進せば則ち虚に乗じ撃破し屍骸を鳴香川に流さん。防守の術当に我に委すべし」と。諜又来、利勝還軍し其の故を知らざるを告ぐ。吉隆又一矩に謂ひて曰はく「縦ひ肥前守大路を避け間道より退軍すとも羽柴加賀守必ず出兵し之を邀つ。小松此を去ること遠からずは則ち我、子と小松に馳せ向ひ加賀守と兵を合せ志を逞しうして一戦すべし。而るに路程相隔つること十四五里、人馬の力及び難し。此憾みと為

すのみ」と。吉隆北荘に在ること数日、西軍稍稍来集す。乃ち一矩と議り大聖寺城を修し木下宮内少輔・蜂須賀至鎮の将高木法齊をして之を戍らしむ。寺西備中守・奥山雅楽助・上田主水正重安（甚右衛門重充子、初称左太郎、事秀吉公領一万石、後有故、事浅野幸長・長晟父子。剃髪号宗古）小松城に赴き以て長重を援く。（大全）毛利輝元、其子秀元をして勢多に出屯せしむ。秀元諫めて曰はく「不可なり。嗣君孤弱、三成之を罔し（罔）（無知にする）以て天下の耳目を欺く。世に共に知る所なり。大人嘗て内府と盟し兄弟の分有り。今宜しく児を関東に遣はし其他無きを明らかにし、姦党を教諭し亟（すみ）やかに三成をして兵を弭（や）ましむべし。三成命を拒まば則ち之を撃つは甚だ易し。然る後内府と力を勠（あわ）せ一心に嗣君を輔佐せば則ち家運以て長久なるべし。儻し従ふ能はずは則ち大人宜しく嗣君を奉じて東征すべし。諸将内府に従ふ者必ず来帰せん。安危の機此二途に在り。今故無く出兵せば勢多く、進退拠を失ふ。計の得る者に非ざるなり」と。堅田兵部少輔讒佞にして輝元に寵有り。密かに輝元に謂ひて曰

はく「秀元卿智謀衆に超ゆ。使を関東に奉じ志趣料り難し」と。輝元之を信じ秀元の言を用いず。秀元已むを得ず勢多に軍す。毛利家記 秀元、三成に秀頼を奉じ将と為るを勧む。輝元に説くが如し。三成用いる能はず。秀元曰はく「然らば則ち参河・遠江に至り内府の西征を待ち以て勝負を決せよ」と。三成曰はく「福島正則・池田輝政・田中吉政等帰降し近きに在り。請ふ、労心する勿かれ」と。輒ち別去す。秀元其成す能はざるを知ると雖へども之を如何ともする無し。毛利家記・松栄紀事 其後、三成の部其党を分け諸将を伊賀・伊勢・美濃・北陸に分け遣はす。輝元及び増田長盛、大阪を守る。其兵総十八万四千九百七十人 松栄紀事、長盛上載徳善院玄以、按ずるに、此時玄以京師に在り。神社仏寺の事を管摂す。大阪に在らざる故に之を削る○本書曰、輝元兵四万一千五百、身在大阪故使秀元将三万、長門守秀就将一万、宇喜多秀家・豊臣秀秋・長曾我部盛親等合七万九千八百六十人向伊勢。按ずるに、上文七月秀元・正家三万余騎を将ゐ伊勢に至る。此と合はず。疑ふらくは其事実に非ず。亦重複す。故に取らず。其余織田秀信・京極高次・稲葉貞通・大谷吉隆等の如きは各其の城に在り、大阪に来らず。而し

て兵数幾千百と書く。蓋し三成其党を已に之れ有る兵数に注記して総計之れなり。今一一之を書かず。細川家傳録亦云はく、十八万四千九百七十人。松栄紀事と合ふ。今二書に拠り其の総数を挙ぐるのみ　方に此時、氏家行廣桑名城に在り、羽柴勝雅神戸城に在り、岡本下野守亀山城に在り、九鬼嘉隆鳥羽城に在り。久留島某と　諸書名称闕。按ずるに明年久留島康親豊後地を賜ふ。別の一人なり。又按ずるに、久留島或は来島と作す。国音相同じ　菅平右衛門、沿海を寇鈔（こうしょう）す（侵入掠奪）。長束伊賀守　正家弟　水口城を守り、原隠岐守　餘史曰名胤房、未知是否　大田城に在り。其余諸将三成に党する者根拠盤結す（複雑に結びつく）。家忠日記曰、行廣兵七百余騎、勝雅八百余騎、下野守六百三十余騎、嘉隆四百余騎、伊賀守三百六十余騎、附以備攷　三成、織田秀信と合謀し岐阜・大垣二城を以て根本と為し以て東海・東山二道を扼す。諸国急を告ぐる者絡繹（えき）（次々とつながる）織（はたお）る如し。神祖の挙止自若として平日に異ならず。餘史・合戦誌○餘史曰、三成置新関於不破。然諸書所不載且無諸将関門之戦。故不取　上杉景勝、兵八千を将る長沼に屯し以て猪苗代・福島・梁川諸城の声勢を為す。直江兼續をして兵二万を将る白川を援けしむ。神祖の班師する

を聞き軍を斂(あつ)め会津に還る。合戦誌　景勝の将佐皆喜びて曰はく「関西蜂起し内府還軍す。我軍勝を取るは必なり」と。独り水原常陸親憲のみ眉を攢(あつ)め憂ひて曰はく　大全・餘史・難波戦記、水原作杉原。親憲之姪有杉原彦左衛門親清則杉原為是。然徳川記・合戦誌作水原。拠長尾家譜載謙信将士名氏有水原常陸介。蓋水原杉原国音相近、今拠家譜訂之○大全曰、常陸初称大関弥七郎。知兵数有武功。上杉景勝給九万石為須賀川城主。為景勝軍監　「衆皆以為へらく、内府、前後の敵を畏れ兵を収むと。誤れり。吾形勢を察するに、内府諸将と謀り関西に出師す。勝敗未だ料るに易からずと雖へども内府必ず勝を得ん。即ち我君の智勇縦ひ内府の上を出づるとも一人の力を以て天下を平定するは難し。故に吾甚だ之が後を憂ふ」と。竟に其の料る所の如し。大全

十三日、征西の諸将清洲に至る。松栄紀事無日。家忠日記係十九日。按ずるに、村越直吉十九日使を奉じ清洲に来。諸将是日を以て清洲に至れば則ち言ふべからず。神祖の発駕遅緩たり。家忠日記誤れり。奥州軍記・慶長記十四日に係く。其説是に近し。今創業記・慶元記・合戦誌に従ふ　福島正則清州城主たり。故に芻

糧を営弁す。池田輝政、神祖の女壻にして吉田の城主なり。故に諸将皆質を吉田城に納め以て其の無貳を明らかにす。軍監井伊直政・本多忠勝書を馳せ駕に趣く。神祖故（ことさら）に其の事に緩たり。諸将頗る之に惑ふ。家忠日記・大全・餘史・合戦誌・慶元記・松栄紀事 土方雄久金沢に至り加賀中納言利勝に諭旨す。神祖又小林又在衛門をして書を斉へ金沢に至らしむ。征西を告げ諭すに、利勝・利政、美濃・尾張の間に出軍し以て期に会戦せよと。利勝、使を能登に遣はし利政をして兵を引き来会せしむ。利政之を拒みて曰はく「曉（さき）に細呂木に在り。秀家・輝元の書を見るに、挙兵専ら国家の為と謂へば則ち家兄の命に従ひ難し」と。利勝、雄久を能登に遣はし之を再三勧むるも利政固執し可ならず。雄久金沢に還り、利勝又使を遣はし之を勧む。利政病と称し出でず。終に利勝と絶つ。西尾藤兵衛利氏小松に至り利氏隱岐守吉次第二子、大全正文云、長重将校勧帰降。載一説曰、藤兵衛勧之。徳川記亦然。今従之 丹羽長重に帰順を説く。長重之に従ふ。棚橋宇兵衛を以て使と為し神祖に上書し罪を謝す。寺西備中守・

奥山雅楽助・上田重安に謂ひて曰はく「吾思ふ所有り内府に帰款す。卿等素(もと)関西に党す。宜しく各其志に従ふべし」と。備中守等皆大聖寺を辞去す。戍将木下宮内少輔・高木法齊等款を神祖に輸(か)へ皆利勝に降る。利勝、季弟猿千代を以て質と為す。猿千代長而名利光。為利勝嗣見下文六年 長重弟左近及び其宰江口正吉・阪井直政の子を以て質と為し講和休兵す。大全・合戦誌・餘史○松栄紀事曰、利勝与長重相戦数月、然後和親。按ずるに、八月九日利勝、長重と浅井畷に戦ひ纔に月を踰ゆ。且書を請け再び長重と戦ふ事無し。故に取らず

烈祖成績巻之八終